うすらひの下に、いる

作・霧島ロック

【登場人物】

泰介

亜季

良平

玉子

直明

和文

美咲

好江

里美

壮太朗

瑤子

市街地から少し山あいに入った戸建ての庭にある、二階建ての倉庫。家とは勝手口で繋がっている。お昼過ぎ。机の上には、食べた後の二人分の食器が載っている
二階から男が降りてくる。椅子に座ってくつろぐ
と、女が湯呑を片手に、洗濯籠を持って、家の勝手口から出て来る。

亜季　（男に湯呑を渡して）はい
泰介　うん
亜季　（男の服装を見て、少し笑う）
泰介　ん？
亜季　変な感じ
泰介　（服のことだと気づき）・・・

女、洗濯物を物干し台に干そうする

泰介　あー、いい、いい
亜季　（干そうと）
泰介　いいって、やるから
亜季　・・・

亜季、泰介の隣に来て座る

亜季　やっとのんびり出来るね
泰介　うん
亜季　ご飯足りた？
泰介　うん

泰介、亜季の付けている、ネックレスに気付く

泰介　あれ？・・・え、それ
亜季　（笑）
泰介　なんでそんなもん。やめろ、バカ
亜季　懐かしいなーって思って
泰介　捨てなさいよ、そんなの
亜季　えー、もったいないでしょ
泰介　変わってんなー、そういうとこ

泰介、洗濯物を干しに離れる

亜季　部屋、掃除しといたから
泰介　うん
亜季　やっぱり布団が足りない
泰介　いらねーよ、別に
亜季　そう？
泰介　どうせ雑魚寝だよ。俺はこっちでいいし
亜季　えー、一緒に寝ようよ
泰介　お前さあ・・・そういうの気をつけろよ
亜季　何が？
泰介　何がってお前、人に聞かれたら
亜季　こんなとこ誰も通らないよ
泰介　そうかもしれないけど

と、洗濯物の間から、リュックを背負った男（良平）が顔を出す

泰介　（男に気付いて）・・・
良平　・・・
亜季　（立ち上がる）・・・どうしたの？なんで？
泰介　あ、こんにちは
良平　説明して
泰介　・・・あのー
良平　（手で遮って。亜季に）説明して
亜季　あ、ええっと・・・大学時代の先輩・・・同じサークルの・・・です
良平　・・・ん？
亜季　ん？
良平　ん？
亜季　ん？・・・あ、木本さん
泰介　木本です。・・・木本泰介です
良平　・・・
泰介　・・・泰介は泰平の泰に／
良平　いやいやいや、全然、え？わかんない、けど・・・（泰介を見て）僕の服
泰介　すいません、脱ぎます

泰介、その場で上下服を脱いで、丁寧にたたむ

亜季　ごめんね、勝手に借りちゃった。私のじゃさすがに小さくて
良平　そういうことじゃなくてさ
亜季　服、汚れてたから
良平　だからそういうことじゃ・・・
泰介　（綺麗にたたんで良平に渡す）ありがとうございました
良平　（受け取る）・・・
泰介　（干したばかりの服を着始める）乾いたかなー・・・うわ・・・
亜季　なんで？取材旅行は？
良平　忘れ物しちゃって
亜季　連絡してくれたら届けたのに
良平　だからその連絡ツールを、スマホを忘れて
亜季　また？・・・旅行の前はしっかり荷物確認しなって、いつも言ってるのに
良平　僕が怒られてる！？今、僕が怒られてるの！？ねぇ！？
泰介　ご主人、ご主人、落ち着いて
良平　ちょっと家空けて、戻ってきたら、庭先で男の声が聞こえて、僕の服着てて、一緒に・・・一緒に寝よう、とか
泰介　（亜季に）ほらーっ！！
良平　・・・
泰介　説明します。一旦、一旦座りましょう
良平　人が留守にしてる間を狙って
亜季　狙う？
泰介　あ、それは違います
良平　違わないでしょ
泰介　ずっといました
良平　・・・え？
泰介　ずっと、っていうか・・・三泊
良平　三・・・うちに？
泰介　いえ、車庫に。ん、車庫？倉庫？
亜季　どっちでもいいんじゃない？
良平　ここに？うちの、倉庫に？
泰介　そうそうそう
良平　そうそうそうって・・・
泰介　すいません
亜季　座れば？泰ちゃんもそれだと風邪引いちゃうでしょ？良平くん悪いけど、服貸してあげて

泰介　すいません、じゃあ、ちょっとお借りして（いそいそと服を着ながら）あ、どうぞ座ってください

良平、納得出来ないが、とりあえず椅子の方に。亜季を真ん中にして三人座る。しばし沈黙

良平　・・・ずっといたっていうのは
亜季　うん、ごめんね。相談しようかな、とは思ってたんだけど
良平　全然気が付かなかった
亜季　だって仕事でずっと部屋に籠りっぱなしでしょ
泰介　お忙しいんですね
亜季　書き上がったんだよね
良平　一応の目処はついたっていうか
泰介　お疲れ様です

再び、居心地の悪い沈黙

亜季　そっか、ちゃんと紹介するね。こちら、木本泰介さん、学生時代の先輩。良平くん、うちの旦那さん。・・・旦那？夫？こういう時、表現いつも困るんだけど
泰介　最近はパートナーとか言うんじゃない？
亜季　それもなんかね、こだわってるみたいで
良平　何でもいいんで。話（進めて）
亜季　うん。で、泰ちゃん、うちを追い出されちゃって
泰介　上さんと、ちょっと（喧嘩したという意）。たまたまその時、別件で連絡を取り合ってて
亜季　ちょうどね
泰介　じゃあ、うち来なよ。車庫空いてるよって言ってくれて
亜季　ちょちょちょ、私はうちに泊まっていいって言ったよ
泰介　そんなこと出来るわけないよ、ご主人いるのに。（良平）非常識ですよねぇ・・・
良平　いいじゃない別に
亜季　お前ね、ホントそういうとこ
泰介　お前・・・
良平　あ・・・奥さんね、ホントに気を付けた方が
泰介　奥さん（笑）
亜季　なんだよ、奥さんでしょうよ。（自分も笑いながら）笑うなよお前、あ・・・

良平　・・・
亜季　さっきも言ったけど、相談しようとは思ったんだよ。だって、ねぇ、自分ちの車庫に知らない男が住んでたら、気分悪いもんね
泰介　住んでるわけじゃないでしょ、住んではいない
亜季　でも、締め切り前はこうなってるし。邪魔しちゃいけないなって思って
泰介　俺は、僕は挨拶させてくれって何度も言ったんですよ。でもコイツ、ごめんなさい、奥さんそういうとこ雑・・・違う、大らかっていうか
良平　あ、昨日僕、ここ入ったんだけど
泰介　あぁ
亜季　え、そうなの？
泰介　深夜の・・・1時くらいですか
良平　いたんだ？
泰介　はい
良平　どこに？
泰介　二階に
良平　行ったけど
泰介　反射的に隠れちゃって、トイレの中に
良平　こっわ
亜季　何しに行ったの？
良平　今日、釣り竿持って行こうと思って
亜季　（良平が持ってるのを指し）それ？
良平　いや、これ調子悪いから。前に使ってたヤツをここにしまってたと思ったんだけど、なくて

泰介、良平が話してる間に席を立ち、部屋の隅に行き、釣り竿を持って来る

泰介　見つけておきました
良平　・・・なんでこれ探してるって
泰介　だって、釣り竿、釣り竿、ってブツブツ言ってたから
亜季　そうなの、この人考えてることつい口からこぼれ出ちゃうの
良平　直んないだよね
泰介　埃かぶってたんで、綺麗にふいておきました
良平　あ、ありがとうございます・・・（反射的に言ってしまうが、ん？となる）
泰介　ご主人、ありがとうは（おかしい）
亜季　この人ってホントに人が良くて
泰介　奥さん、そういうとこに惚れたんでしょ

亜季　ちょっと、やめてよ。まー、それだけが取り柄だから
泰介　おいおい、ノロケか？勘弁してくれよ～

少し和気あいあいの空気になる

良平　（自分を取り戻して）いやいやいや・・・え、知り合いが困ってたから、泊めただけっていうこと？
亜季　うん
良平　だからって、こんな、車庫に
泰介　以前何度か泊ったことがあって
良平　え！？
亜季　学生の時だよ、サークルのみんなで
良平　サークルっていうのは
亜季　・・・演劇の
良平　初めて聞いた
亜季　だって恥ずかしいから
良平　別に恥ずかしくは
泰介　合宿とかしたいねって話になって、でも学生の時なんてお金ないじゃないですか
亜季　そしたら、うちのお父さんが、ここ使っていいよって
泰介　程よく田舎じゃないですか。騒いでも近隣に迷惑かからないし、近くに川もあるし、いいところですよね
亜季　まあまあの頻度で遊びにきたよね
泰介　だから、あんまり抵抗なくて
良平　あー・・・いやいやいや
亜季　え、何？何がひっかかってる？
良平　何がって。普通、だってそう思うでしょ
亜季　・・・？
良平　だから・・・奥さんの浮気を、疑っちゃうでしょ？
亜季　浮気？
良平　・・・
亜季　・・・え？・・・私が？・・・浮・・・

亜季、口元を抑えて席を立って、部屋の隅に。泰介、心配してそばまで行く

良平　・・・
泰介　亜季・・・

亜季　（涙をこらえて）ううん、大丈夫。ちょっとビックリして・・・想定外のワードが飛び込んできたから
良平　想定外・・・
泰介　・・・ご主人
良平　・・・
泰介　ご主人
良平　・・・
泰介　ご主人！！
良平　何？何ですか！？
泰介　泣いてます
良平　・・・僕？（のせいですか？）
泰介　亜季は、奥さんはそんな人じゃないですよ
良平　・・・
泰介　俺は客商売やってて、色んな夫婦見てきましたから、わかるんです
亜季　いいから
泰介　久しぶりに会って。あーいい顔してるな、幸せなんだなって。奥さんはあなたのこと・・・愛してますよ
良平　うわあ、（話が）全然入ってこない
亜季　（涙をはらって）いい。いいから・・・ごめんね、夫婦のなんか、みっともないことに巻き込んじゃって
泰介　バカ、いいよ
良平　え、僕？・・・僕が変なの？
泰介　ご主人
良平　だって、その（首を示し）それは？
泰介　あー、これは・・・あげたんです、学生の時に。誕生日だったから
亜季　昔、付き合ってた時に
泰介　余計なこと言うな
良平　付き合ってたんだ！？ほら、付き合ってた！
亜季　だから学生の時だよ！
良平　だからそれを何で今付けてんの？
亜季　だから懐かしくなって
良平　だから理由になんないよ
亜季　だから合宿の時に、この場所でもらったものなの
良平　だからそれはもう再燃してるじゃない。少なくとも再燃を試みようという意思を感じる。さっきだって・・・

良平、誰かが二階から降りて来たのに気付いて、言葉を止める。つられて泰介と亜季も階段の方を見る。女が一人立っている

泰介　降りてくんなよ
玉子　だってさー、あ、ごめんなさいね、私関係ないんだけど、この二人はそういうんじゃないですよ
良平　・・・誰？
泰介　気にしなくていいです
玉子　こんにちは、あ、亜季さんご飯おいしかった、でも強いて言えば、ジャガイモはもう少し煮込んだ方が私は好き
泰介　関係ないんだよ。ややこしくなるから、引っ込んでろよ
玉子　だって、なんか落ち着かなくて。えーっと、私はこの人がやってる居酒屋でバイトしてるものなんですけど、着替えを届けにきて
泰介　パンツしか持ってこなかったろうが
玉子　しょうがないでしょ、途中で見つかっちゃったんだから。聞いてご主人、ここの夫婦喧嘩ばっかりして、その度に私がまーまーまーって間入って、今年まーまーまーって一番言った日本人じゃないかな。世界でも上位にランクインすると思う。あ、でも外国人はまーまーまーとか言わないか、やだ、私（一人でウケる）
泰介　何が面白いんだよ
亜季　すごく喋るね
良平　よくわかんないけど、二人ここにいたってこと？
玉子　あ、私は昨日の夜来て、一泊二日です
良平　一泊・・・え、じゃあ、あの時あなたも隠れてたんだ？
玉子　まさか、こんなきったない所で寝られませんもん
泰介　お前！（良平に）すいません
玉子　私は奥さんの部屋で寝ました
良平　・・・！
亜季　ごめんね、玉ちゃんのこと話すと、泰ちゃんのことも話さなきゃいけなくなるでしょ
玉子　あ、玉ちゃんって私。石橋玉子って言います
亜季　だからそれはちょっと大変かなって
玉子　そういうもんよ。嘘を一つつくと、その嘘を隠すために、新たな嘘をつかなきゃいけなくなる
亜季　嘘はついてないよ。話さなかっただけ
玉子　とにかくこの二人はそんなんじゃないですって。私、男女のそういうのわかっちゃうんですよ

泰介　うるせ、バカ！謎のでかい女が急に出て来てそんなこと言ったって、説得力皆無なんだよ
良平　いや、あなたもね
玉子　でも旦那さん、この人に頭上がらないはずだよ
良平　・・・え？
玉子　お二人が一緒になるとき、ここのお父さんすごく反対してたでしょ
泰介　それはいいから
良平　確かに最初はそうでしたけど、なんでそれを
玉子　その当時旦那さん、まだ、こう言っちゃなんだけど、食うや食わずだったじゃないですか。そんな男に娘を任せられない、ってお父さんが言うのをうちの店長が、ねえ
泰介　久しぶりに電話がかかってきて、だからもう5年も前です
玉子　店長が「娘さんが選んだ相手ですよ、長い目で見てあげましょうよ」って
泰介　お前人の話を、さもその場にいたように話すなよ
良平　ホントに？
亜季　うん。私も後で聞いたんだけど
泰介　いや、関係ないです。どのみち一緒になってましたって。こう見えて頑固だから
亜季　まあね
泰介　犬拾って来た時もそうだった。8匹も
亜季　あー、あったね
泰介　すぐ動物拾ってくるんですよ。当時は犬とか猫とかしょっちゅう捨てられてたから
玉子　優しいんだね
亜季　違うよ。ほっとけないだけ。ムラムラくるっていうか
良平　ムラムラ？
亜季　私が何とかしてあげなきゃって、そんな気持ちになる
玉子　わかるー、尽くすタイプ、私とおんなじ・・・（泰介に）よかったね、拾ってもらって
泰介　犬と一緒にすんな
玉子　（良平に）良かったですね
良平　・・・うん・・・うん、うん。事情は飲み込めました。でもあの、世間体っていうのもあって、これ以上ここには・・・
泰介　ですよね
良平　奥さんともどうにか、仲直りしてもらって
泰介　（玉子に）アイツ、まだ怒ってんの
玉子　当たり前だよ
良平　でも、戻った方がいいと思います。お店も大変だろうし

玉子　あ、そこは（平気）。みんな言ってる、あの人いらなかったねーって
泰介　・・・
良平　でも、やっぱり
泰介　わかってます。帰ります
良平　すみません
泰介　明日、必ず
良平　・・・明日？
泰介　はい、明日
良平　・・・今日、は？
泰介　今日は、こちらに
良平　・・・出来れば、あの、今日がいいな
玉子　これからここで集まりがあるんですって
亜季　昔のサークル仲間がね
泰介　流れでそういう話になって
良平　・・・あー。いっぱい来るの？
亜季　うん。ごめんね、伝えてなくて
良平　ううん。それはいいんだけど。
亜季　取材旅行でちょうどいないし、いいかなーって
良平　・・・あー、そっかそっか。・・・なるほど、ＯＫＯＫ、わかった
泰介　すいません
良平　じゃあ僕も参加していい？

亜季と泰介、思わず顔を見合わせる

良平　え？ダメなの？なんか、まずいの？
亜季　旅行は？
良平　日程ずらしてもらう
亜季　行ってきなよ
良平　なんか、都合悪いの
泰介　そんなこと
良平　えー、なんか・・・
亜季　何なの、さっきだって浮気疑ったり。気分悪いんだけど
良平　それはだって、状況が状況だから
玉子　まーまーまー
良平　でも、挨拶くらい
泰介　そんな挨拶するような連中じゃないですよ

亜季　そう。みんな柄悪いよね。苦手なタイプだって
泰介　人を見たらかつ上げする、みたいな
亜季　良平君なんか恰好の餌食だよ。輩。会わない方がいいって
良平　逆に心配なんだけど

庭の方から直明が入ってくる

泰介　あ
直明　（亜季に）おーー、久しぶり
亜季　（舌打ち）早くないです？
直明　え、あ、そうかな
泰介　お前玄関から来いよ
直明　いや、声が聞こえたから。あれ、なんかまずかった？・・・あ、（良平に会釈）
　　（玉子に）あれ？なんでいるの？
玉子　ちょっと。ご主人、トイレ借りますね
泰介　お前、上の使えよ
玉子　だって匂いきついんだもん

玉子、家に入っていく

泰介　着替え持って来させたんだよ
直明　あぁ。（倉庫の中を見て）うわー、懐かしいねー。
良平　サークルの？
亜季　うん
良平　全然普通の・・・
直明　（良平を見て）えっと・・
亜季　うちの旦那です
直明　あー・・・え？旅行でいらっしゃらないんじゃ
泰介　・・・
良平　初めまして。あの、妻がお世話になってます
直明　いえ、全然そんなことはないんですけど。あ、須藤です
亜季　一個上の先輩
直明　今日は、ご一緒に？
良平　すいません、邪魔にならないところにおりますんで
直明　いや、そんな（泰介を見て）
泰介　・・・

良平　そうだ。僕、料理作るよ！
亜季　いいって
良平　ここんとこずっとまかせっきりだったから、何人くらい来るの？
泰介　・・・あと二人
良平　じゃあ買い出し行かなくて平気だね、ハウスのシチューでいいかな？
亜季　いらない。さっき食べたばっかりだし
良平　夜用、今から仕込んどかないと
亜季　泰ちゃんに作ってもらうつもりだったから
良平　そうだ、頂いたワイン開けちゃおう！

良平、家の奥に

亜季　まーいっか
直明　状況わかってらっしゃるの？
泰介　いや。一応説明しといた方が
亜季　いいよ。最悪お酒飲ませて寝かせちゃってもいいし
泰介　ご迷惑にならないかな
亜季　大丈夫だよ。身内だし
直明　玉ちゃんは
泰介　アイツはすぐ帰るからいい
直明　（亜季を改めて見て）いやー、でも変わらないね
亜季　先輩もだよ。あ、でもちょっと肉つきましたね
泰介　どんだけ痩せてたんだよ
直明　でも、あんまり久しぶりって感じしないね

会話の途中で玉子戻ってくる

亜季　そんなもんですって。ここは頻繁に？（会ってる？）
直明　でもごくごく最近だよ。和先輩達のことがあってから
亜季　ふーん
直明　泰介さんの店行ったことないの？
亜季　一回あるんですけど、なんかやかましくて
直明　あー、下町のいい雰囲気だけどね
玉子　常連の親父どもが下品ですもんね
泰介　お前なにくつろいでんだよ、早く帰れよ
玉子　は？どこに帰れって言うの？お姉さん今（怒ってる）

泰介　お前関係ないだろ
玉子　着替えを持ち出そうとした時点で、あなたの側についたことになってんの！
亜季　奥さんの話
直明　あぁ
玉子　目ぇ向いて襲い掛かってきたから、私店長のパンツだけ握りしめて、階段三段飛ばしで駆け下りて
亜季　一緒に住んでるの？
直明　住み込みだから
泰介　悪かったよ。じゃあこれやるから
玉子　何これ？
泰介　満喫の優待券
玉子　（受け取り）・・・あ、ダメ
泰介　なんで？
玉子　だってこれ猫満喫じゃないですか。私猫アレルギーなんで
直明　猫満喫？
亜季　猫カフェと漫画喫茶が合わさったヤツ
泰介　我慢しろよ。何が猫アレルギーだよ。何様だよ、お前みたいなもんが
玉子　お前みたいなもんがって・・・パワハラで訴えてやろうか！
泰介　勝手にしろ！何でもいいから出てけよ！
亜季　いいんじゃない、別に。うちの旦那もいるし
泰介　それは、ご主人のうちだから仕方ないけど
亜季　違う、私のうちだよ。あの人転がり込んできただけだから
玉子　事実上の婿養子でしょ。そんな感じ。キャラ裏切らないわ

亜季、家の方を見ると、小窓に人影が。近づいて勢いよく開ける。良平が立ち聞きしていた

亜季　シチューは？
良平　今、玉ねぎ切ってるとこ
亜季　なんか用？
良平　苦手な食材とかないかなって
泰介　お気遣いなく
直明　何でも食べます
良平　腕ふるいますんで
玉子　逆に私、キャビアとかあったらテンション爆上がりです

良平、小窓をぴしゃりと閉める

玉子　何、感じ悪くない？（小窓を開けて）キャビアーー！

泰介　やめろ

玉子　とにかく帰らないっていうか、帰れないんで

泰介　お前・・・

亜季　いいって。何が起きるわけでもないでしょ。ですよね？

直明　うん。・・・（笑）でも

亜季　？

直明　いや、やっぱりここ（亜季と泰介）はタメ口なんだって思って

亜季　さすがに今更敬語にはなんないね

庭の方から、旅行鞄やリュックを背負った、和文と美咲が来る

和文、泰介に目で軽く挨拶し、直明を見て再会に感動し、声も出ない様子で近付いて、握手する。直明も無言で対応する。今度は亜季を見て、また感動し、声もなく近づき握手

泰介　なんか言えよ

和文、今度は玉子を見つけ、同じ様子で近づこうとするが

泰介　そいつは関係ない

和文　だよね。あれ？誰だっけって思って

泰介　うちの従業員。悪い、いない方がいいよな？

和文　・・・いや、そっか・・・うん、僕は大丈夫だけど

玉子　ほらあ

美咲　お父さん、お父さん、紹介して

和文　あ、ごめん。えーっと、美咲です

美咲　はじめまして

玉子　玉子です。玉ちゃんって呼んでください

美咲　あ、じゃあ私はミーちゃんで

玉子　オッケ、じゃあ玉ちゃん、ミーちゃんで

美咲　コンビ結成した

和文　そうだね。あと同期の泰介、一個下の直明で、二個下の亜季

美咲　（泰介を見て）・・・あれ？

泰介　・・・！

美咲　前にお会いしましたよね？
泰介　・・・さあ、どうだろう
和文　・・・
美咲　ほら、病院で
泰介　・・・あー、そうですね
美咲　なんか顔色悪くて、そっちが入院した方がいいんじゃないかって私
泰介　二日酔いだったからかな
美咲　お酒好きなんですか？
泰介　はい。主に提供する方ですけど
和文　今は居酒屋やってて
美咲　へえー
泰介　是非今度飲みに来てください
美咲　行きたーい、でもお酒は。私、まだ未成年だから
玉子　どこがだ？！目じりの皺を隠してからボケろ
美咲　えーー！！
泰介　失礼なこと言うな！
美咲　（和文に）皺ある？ねえ！
和文　老眼でよくわからない
亜季　じゃあセーフで
直明　でも先輩の店、料理も本当においしいんですよ
美咲　行きたい。連れてって
和文　うん、行こう行こう
玉子　今もめてるんで、当分ムリですよ
泰介　余計なこと言うな
和文　何、もめてるって？奥さんと？
泰介　まあ・・・
和文　何やったの？まさか浮気とか（亜季と見て）・・・あいや、違う違う
泰介　だよね、ビックリした
和文　え、なになに？置いてかないで
美咲　学生時代、ここ付き合ってたんです
直明　あーー
美咲　半年もたたなかったけどな
泰介　今は私、旦那？夫がいるので
亜季　そうだよね
和文

亜季、小窓を開ける。良平が下から顔を出す。立ち聞きしていた

良平　こんにちはー
和文　あ、はじめまして
良平　妻がお世話になって／

亜季、小窓をぴしゃりと閉める

亜季　すいません、予定狂っちゃって。何だったら、追い出すので
美咲　え、なんで？多い方が楽しいでしょ、ね
和文　・・・うん。こっちはいいんだけど、ご迷惑にならないかな
亜季　おじさんたちはそればっか言いますね。気にせずで
和文　ありがとう

和文、ここで改めて車庫を見渡す。「あ、あれ。あれも」などと、置いてある物に反応して、感慨に耽ながら、椅子に座り、みんなの方を見る

和文　・・・月並みなセリフで恥ずかしいけど・・・昔に戻ったみたいだね

美咲、興味深げに車庫の中をぐるり見回す。全員その姿を目で追う

美咲　へえ、学生時代の思い出の場所なの？
和文　うん・・・部室があった建物とかはとっくになくなったんでしょ
亜季　地震の時、傾いちゃったらしいですよ
美咲　えーー！
玉子　こっわ！
泰介　こないだ大学覗いてみたんだけど、建物とか全部新しくなってて
直明　おもかげないですよね
和文　そういうことで言うと、ここは変わらないね。ホッとする
美咲　でも人様のうちでしょ。迷惑じゃなかったのかな
亜季　お父さん賑やかなの好きだったから
和文　去年亡くなったんだって？
泰介　お前連絡くらいしろよ
亜季　本人の意向で。気付いたら亡くなってたくらいがいいって
直明　親父さんらしいね
和文　でも懐かしいーなー、ここで麻雀したり、バーベキューしたり、花火したり

泰介　流しそうめんとかな。冬はそのドラム缶で焼き芋作ったり
和文　そうそう
美咲　お芝居のサークルだったんですよね
亜季　お芝居なんてやってましたっけ
直明　やってたよ！・・・一応
泰介　俺たちは主にスタッフワークだったし、俺が大道具やって
和文　僕が演出
美咲　へぇ、すごい
和文　別にすごくないよ
亜季　主に音響
直明　照明
玉子　え、肝心の役者は？

全員、なぜか黙る。微妙な空気

玉子　なに？まさかいなかったの！？
和文　何人かいたんだけど、一人を除いてみんなやめちゃって
美咲　どうして？
亜季　その一人が強烈だったんで
玉子　あー、わかった、女優だ、パワハラ？
和文　違うけど、役に入り込みすぎちゃうっていうか
直明　パワハラなんかよりずっと怖いですよ
泰介　付き合いきれないって、みんなやめちゃった
美咲　それでお芝居とか作れるの？一人芝居ってこと？
亜季　仕方ないから、この中でじゃんけんで負けた人が、相手役をつとめるっていう
直明　ほとんど罰ゲームだよね
玉子　そんな嫌だったらやめりゃいいのに
亜季　スタッフワークは好きだったんで。ここってタイミングで曲ばちーんって決まると最高
美咲　どんなのやってたんです？シェイクスピアとか？
亜季　それなんだっけ？
直明　それは知っとこうよ。あのー・・・いっぱい書いてる人だよ
美咲　ホントにやってました？
和文　何でもよかったんだよ。集まってわーわーやってるのが楽しかっただけで
美咲　ふーん
泰介　うちの学校もともと演劇サークルなんてなかったんだけど、そいつが作ったんだ

美咲　へー、精力的。その人も今日来るんだよね？
和文　・・・うん、来る。来てくれると思う
美咲　なんて人？
和文　僕と泰介の同期で、・・・瑤子、鈴木瑤子
美咲　瑤子さん・・・ふーん

扉が開いて、良平が顔を出す

良平　あのー、お茶入りましたけど（しきりに手を掻いている）
亜季　仕込み終わった？
良平　ううん、まだ
亜季　手、どうしたの？
良平　エビ剥いてたら痒くなっちゃって
亜季　だからもういいって、泰ちゃんにやってもらうから
泰介　ホントにやりますよ
良平　いえ、一度口にしたことはやり遂げるタイプなんで。締め切りだって、守れなかったことない
和文　（美咲に）小説を書いてらっしゃるんだって
美咲　そうなんですか？すごい！
良平　いや、全然。ごめん、ちょっとムヒ塗ってくる（家の奥へ）
亜季　えー！そんな手で料理しないでよ。あ、どうぞ（続いて家の奥へ）
玉子　私キャビアがあれば何でもいいんで（続く）
美咲　お邪魔しまーす

続いて美咲、直明と家に入っていき、泰介と和文だけが残る

和文　泰介・・・ごめん
泰介　なにが
和文　店、全然顔出さないで
泰介　そっちかよ。いいよ、遠方からわざわざ来るほどじゃねーよ
和文　そのくせ、こんな時だけ・・・
泰介　・・・奥さん
和文　・・・？
泰介　相変わらずイイ女だな
和文　・・・取らないでよ
泰介　（家に入りながら）どうかなー、俺の方は離婚するかもしれないしなー

和文　（続いて）えー、そんな深刻なの？

誰もいなくなる。時間経過を思わせる描写がある。下手の庭先から、女性が慎重に様子をうかがうようにして入ってくる。洗濯物の衣服を注視したあと、スマホを確認しながら、更に奥へ。女性の左腕から手の甲にかけて、そこそこ年数を経た火傷のあとがある。と、ドアが開く。女、慌てて隠れる。玉子がスマホを片手に出て来る。動画を見ながらリズムに乗っている。スマホで動画を確認したあと、置いて、曲に合わせてダンスし始める

好江　（様子を見て）・・・

玉子　あ、違う（動画を確認しに行き）・・・あ、そっか

曲をかけ、再び踊り出す。途中から好江もそれに加わって、しばらく二人並んで踊る。玉子、気が付かない。振付の流れで後ろを振り向いて、ようやく気付く

玉子　！！

玉子、ビックリして車庫の隅まで逃げる。好江、曲を止めて玉子に近付く

玉子　え！？・・・え！？

好江　何やってんの？

玉子　いや、ちょっと、ＢＴＳの振りの確認を

好江　ＢＴＳ最高だよねー！！

玉子　ねーー！！特にジミンのダンスのしなやかさなんてもう／

好江　置いといて

玉子　はい

好江　なんで、**ここで**！ダンシング、ナウ？

玉子　いや、最近ダンスに凝ってるって話をしたら、是非披露してくれって言われて、どうせ披露するならちゃんとやりたいって思って、だって私って完璧主義なところがあるじゃないですか？

好江　・・・

玉子　・・・ないですよね、すいません

好江　誰に？

玉子　え？

好江　誰に披露すんの？

玉子　あの、店長の、同窓生の皆さんに

好江　同窓生？
玉子　昔の、演劇サークルのお仲間が集まってて
好江　え、じゃあ里美ちゃんとか？
玉子　は、いないですけど。須藤さんとか
好江　須藤？・・・あー、最近店に顔出してくれるようになった（あの人？）同窓会？
玉子　はい
好江　・・・くっそー、あの野郎余裕だな
玉子　あの、なんでここがわかったんです？

好江、玉子にスマホを放り投げる

好江　ＧＰＳ
玉子　え？
好江　追跡アプリ入れた
玉子　こっわ！え、信じらんないんですけど。従業員の動向を監視してんですか。そこまで落ちたんですか
好江　あ！？
玉子　ごめんなさい
好江　あんたが！酒に酔いつぶれては、どっかの路上で補導されたり、人様に迷惑かけるから、仕方なくそんなもん入れたんだよ
玉子　あ、なるほどね・・・でもだったら一言あっても
好江　そだねー。ごめんねー
玉子　軽っ
好江　てかアンタさ、潰れるぐらいならうちで飲みなよ
玉子　お姉さんの達の顔見ながら飲んでても、いまひとつ酔えないっていうか
好江　ふーん、で、ここでは気持ちよく飲めてるってわけだ。ダンスなんかして、楽しそうだな、おい
玉子　いや、それは
好江　正式にそっち側に回ったって解釈でいいんだよね、ね
玉子　何言ってるんですか。偵察に決まってるじゃないですか
好江　ほー、ほけきょ
玉子　あれ？ウグイス？・・・だから店長の動向チェックして、逐一お姉さんに報告しようと思ってました
好江　わーさすがだねー！・・・てウソつけこら、お前なめてんのか、あ？おい、なめてんだろ、なぁ、なぁ（ボディを小突きながら）
玉子　ちょっと、やめて、子宮に、子宮に響く

好江　大体ここは誰のうちなの？
玉子　ここは店長が昔付き合ってた女性の家で
好江　・・・
玉子　あ、でもそれはどうでもよくて、昔ここを合宿所代わりに使ってたらしくて
好江　待って待って待って。付き合ってた女？
玉子　です。・・・でもそれはどうでもよくて
好江　どうでもいいかどうかはこっちが決めっから
玉子　ですよね。・・・でもあの、二人は終わってるんで。あ、でもここの旦那さんは
　　不倫を疑ってて、ちょっと揉めたんですけど
好江　・・・
玉子　いや、でもそこは私がちゃんと間に入って、処理したんで・・・あれ？私余計な
　　ことばっかり喋ってる？とにかく二人は終わってるんで
好江　終わってるっていうのは、私と泰介のこと？
玉子　いや、ちがくて、不倫してた二人。あ、違う。やだもう、私ホント話が下手
好江　そんなことないよ。よく分かったよ（車庫の物を物色し始める）
玉子　あれ？なんか探してます？
好江　なんか棒状の硬い物とかないかなって思って
玉子　あ、上にゴルフセットあったけど
好江　いいじゃないそれ（上に上がっていく）
玉子　あれ？私また余計なこと言った？お姉さん、パター？パターの練習する？そんな
　　わけないか

二人、車庫の上に上がっていく。と、勝手口のドアが開き、スマホで通話中の
直明が出て来る

直明　はい、午前中にもご連絡しました。須藤と言えばわかります。お願いします・・・あ、お世話になってます。どうですか・・・そうですか、わかりました。
　　あ、もし容体に変化があれば、すぐにこちらに折り返しいただけますか？何時でも構いませんので・・・はい、失礼します

続いて泰介が出て来る

泰介　・・・病院？
直明　はい
泰介　どお
直明　変わらずです

泰介　そっか・・・お前大丈夫なの？
直明　・・・
泰介　立場的に
直明　ま、なるようになりますよ

和文も出て来る。扉を閉めるときに、中で盛り上がってる嬌声が聞こえる
和文、二人と机を囲んで座る

泰介　やっぱりそう簡単にはいかないよな
和文　うん
泰介　でも元気そうでよかったよ
和文　・・・
直明　なんか、あの頃のまんまですね
和文　うん
泰介　このままでもいいんじゃないかとか、思っちゃうよな
直明　それは、無理ですよ
泰介　わかってるって。わかってるから、思ったの
和文　うん。現実を見ないとね

亜季が出て来る

泰介　お疲れさん
亜季　・・・（笑）
泰介　ん？
亜季　いや、絵面が・・・一瞬昔と同じだあって思ったんだけど、やっぱり（違う）
直明　同じなわけないでしょ
和文　何歳になったと思ってんの？
亜季　いや、でも私はこれくらいが。野菜も新鮮シャキシャキより、漬物の方が
和文　発酵が進み過ぎて、変なにおい出ちゃってるよ
泰介　やめろ
亜季　・・・体、大丈夫ですか？
和文　（体臭のことだと思って、嗅ぐ）え、そんな？
亜季　じゃなくて、退院してからずっとなんでしょ？
和文　うん
亜季　それは体力持っていかれますわ
和文　そうでもないよ。それに、今日で終わりだから

直明　・・・
和文　・・・あ、疲れるよね、ごめんね。あ・・・改めて、今日は（立ち上がって頭を下げる）
泰介　だからやめろやめろ
亜季　私は全然。楽しいし
直明　僕もです
亜季　なんか、昔、先輩に無理矢理相手役に狩り出された時のこと思い出して
直明　やっぱり？そうだよね
和文　・・・
亜季　なんだかんだ楽しかったですもんね
泰介　中、まだやってんの？マリオパーティ
亜季　うん、良平くんと目ぇギンギンにして
和文　ホント入り込むからね、参るよ
亜季　でも流石ですね。良平くん人見知りで初対面であんなに打ち解けないですよ。完全に心開いてる
和文　それより旦那さん、いい人じゃない。よかったね
亜季　それだけですけどね
和文　よく言うよ、書き物で身を立てるなんてすごいよ
泰介　仕事調子いいんだろ
亜季　そうなんですよねー。なんか張り切っちゃって
直明　いいことでしょ
亜季　色気がな、ちょっとしおれてるくらいの方がいいんだけど
泰介　始まったよ
直明　じゃあ、こちらなんか
亜季　今、イイ感じですよね
泰介　バカか
和文　あ、さっき離婚するかもとか言ってたけど、冗談だよね
亜季　そうなんだ？じゃ、タイミング合わせよっかな
泰介　やめなさいよ

上から声がして、好江とゴルフバッグを担いでキャディーの帽子を被った玉子が降りてくる

玉子　お姉さん、お姉さん、ちょっと待って
好江　（降りてきながら）いいんじゃないかな、いいと思う
泰介　お前、なんで！？

直明　奥さん？
好江　どーもー、うちのが、あ、もううちのじゃないか、お世話になってます
亜季　あ、こちら／（こそ）
好江　これからもお世話になります。ここに着替え入ってますんで、あと諸々必要なもの入れといたんで
泰介　ちょと待て、お前
直明　奥さん、なんか誤解されてるんじゃ
和文　あの、初めまして／
好江　全部聞いてたんで。このままでいいとか思っちゃうよな、とか聞いてたんで
直明　切り抜きがひどい
好江　男ってこういう時つるむからウザいわ。今後店、出入り禁止で
直明　えーー！！
好江　じゃあ私はこれで
亜季　なんかこんなのばっかりだね
和文　奥さん、初めまして／
好江　別にね。私はコレが誰と乳繰り合っていようが、どうだっていいんですよ。ただね、店をほったらかしにするのだけは
泰介　お前が出てけって言ったんだろうが
玉子　まーまーまー
和文　初めまして
好江　原因作ったのはあんたのくせに、この・・・6番アイアン！
玉子　はい（ゴルフバッグからアイアンを出す）
和文　奥さん！
好江　・・・はい？
和文　初めまして、木本くんと同期の山根といいます
好江　あー、どうも。え・・・山根、さんて・・・（泰介を見る）
和文　ちょっと気になって。喧嘩の原因ってなんですか？
泰介　いいよ、そんなこと
好江　そんなことって。このバカ、お客さんに手ぇ出したんですよ
和文　・・・なんだ、そっちか。よかった
好江　よかったって
和文　すいません、コイツは昔から女癖が悪いっていうか、純粋に好きっていうか。あ、でも、ここは終わってますんで
泰介　何言ってんだよ
和文　だって、僕が原因かと思ったから
直明　違いますよ、手を出したっていうのは

和文　え？
好江　殴ったんですよ、客を。信じらんない
和文　・・・どうして？

ドアから満足げに美咲が出て来る

美咲　勝った
亜季　何？・・・あー、マリオ？
美咲　すいません、旦那さん泣かしちゃいました
亜季　泣き上戸だからね
美咲　（好江に気付き）こんばんは。あ・・・もしかして、瑤子さん？
好江　いえ
泰介　違う、俺の・・・
玉子　奥さん
好江　元ね、元
美咲　なんだ（落胆）。あ、ごめんなさい
直明　今日ここでサークルの同窓会やってて
好江　それは聞きましたけど、（美咲に）こんばんは、うちの元亭主のご学友ですか？
美咲　えーー！！なわけないじゃないですかっ！
好江　・・・あーごめんなさい。じゃあ、後輩の？
美咲　後輩？
直明　山根さんのご身内なんです
好江　あー、・・・ご身内っていうのは

少し華美な服装をした女性が、庭先の方から来る

里美　あの、こんばんは
泰介　あれ？どうして
里美　途中で抜けてきちゃった（和文を見て）あー・・・
和文　久しぶり

里美、美咲に目を向けて、何か言いかけるが、やめて和文達を見る

和文　・・・
美咲　こんばんは
里美　こんばんは

美咲　お待ちしてました
里美　え？
美咲　今日ずっとお話聞いてて、すっごくお会いしたくて
亜季　あ、違うよ
美咲　え、だって。なんか自己主張強めだし
里美　え！？あ、服？
亜季　先輩恥ずいっすわ。仲間内の同窓会にそんな気合入れなくても
里美　違う違う、これは
泰介　結婚披露宴だったんだよ
和文　そうだったんだ？
亜季　それはおめでとうございます
美咲　おめでとうございます
里美　私じゃないし。わざとだよね
亜季　肝心のご自身の方は
里美　まだだよ。コイツ、久々に会ったのにいじってくるわー
好江　里美ちゃん
里美　好江さん、なんで？一緒に来たんですか
好江　そうじゃないんだけど

良平、目を泣きはらして来る

良平　さ、第5ラウンドいこうか
美咲　えー、弱い者いじめしたくないんだよなー
良平　ぐぅぅ！
里美　もしかして旦那さん？
亜季　はい。あ、なんかごめんなさい
里美　なに、コイツ
直明　仲悪かったっけ？
里美　まー昔からこうだけど
良平　もう一勝負
美咲　すぐ泣くし
良平　泣いてねーし
玉子　ウソつけ
美咲　どうしよっかなー、そうだ、私、欲しい物あるんですよね
良平　わかった。じゃ賭けましょ
美咲　やった

和文　美咲！
美咲　いいじゃん別に
好江　なんか奔放な人だね
良平　その代わり、得意なカード切らしてもらうけど
美咲　なんでもいいぜ。負ける気しないんで
良平　じゃ、マリオカートで

美咲、急に空気が変わる

美咲　・・・マリオカートって・・・車じゃないですか？
良平　そうだよ、ブッブーン
美咲　・・・嫌です
良平　え、なんで？何でもいいって
美咲　だってお酒入ってるじゃないですか
良平　うん・・・いや、関係ないでしょ、ゲームだし
美咲　嫌です
良平　ははーん、苦手なんだ？
美咲　絶対嫌です！！

空気がぴりっとなる。

和文　・・・美咲
良平　（泣く）
美咲　あ、ごめんなさい、もうーすぐ泣くー
亜季　いいよ、スルーして
美咲　そうだ、星のカービィやろうよ
良平　（泣きやんで）いいよ、俺それも得意だけど
美咲　絶対負けない（家の中へ）
亜季　ねぇ、人数増えたんだけど、まだお酒ある？
良平　あと、ビールがちょっとだけ
亜季　買ってこなくちゃ。（好江に）飲みますよね？
好江　いや、私は
泰介　こいつは帰るから
亜季　ちゃんと話しといた方がいいよ。誤解されたまんまも気持ち悪い。
泰介　・・・
亜季　（里美に）先輩も生意気に小洒落たワインとか好きでしたよね？

里美　私、あんたになんかやったっけ？
玉子　まーまーまー
好江　それやめろ。なんの効果もないからな
泰介　いいよ、俺が買ってくる。（好江に）一緒に
好江　え？
泰介　どうせ車で来たんだろ、あとちゃんと説明する
好江　飲んだら乗れなくなるし
泰介　だから飲むな。玉も
亜季　じゃ、お願いします

亜季、家の中へ。泰介、好江、玉子、庭から外に出ていく

和文　久しぶりだね
里美　ホントに
和文　泰介の奥さんも知り合いなんだ？
里美　たまにお店に顔を出してるんで。（直明に）最近ちょくちょく行ってるんでしょ？
直明　うん。アットホームでいい店だよね
里美　でも仕事忙しいんでしょ？
直明　その時々だよ。異動が多いのは辟易だけど、分かってたことだし
和文　大変そうだね
直明　・・・
和文　あ、お前が言うなって話だよね
直明　いえ
和文　ホントに色々（謝ろうと）
直明　（制して）もうそれは。さっきからこればっかり
里美　相変わらずな感じ
和文　ビックリしたでしょ？
里美　話は聞いてたんで
和文　あ、とりあえずビール飲むでしょ？中入る？
里美　いえ、一旦ここで。懐かしいですね
和文　ちょっと待ってて
里美　すいません

和文、家の中へ

里美　瑤子先輩、変化なし？
直明　うん。今のところ
里美　あんまり詳しくは聞いてないんだけど、事故のあと、一度昏睡状態になったとか
直明　いや、意識はあったんだけど、反応しないっていう
里美　それは、頭を打ったから？
直明　いや、事故からはタイムラグがあるから。
里美　じゃあなんで
直明　強いストレスから自分を守るために、脳がそういうことをしたんじゃないかって
里美　あー、分からなくもないかも
直明　美咲ちゃんは亡くなったのに、自分はほとんど無傷で、運転してたのも自分だから、耐えられなかったんじゃないかな
里美　でも、瑤子さんのせいじゃない
直明　理屈じゃないし
里美　美咲ちゃんってまだ１７歳だっけ？
直明　うん。高２かな
里美　どれくらいそういう状態が続いたの？
直明　倒れたのは美咲ちゃんの葬儀が終わって、しばらくして。で、そこから約３か月
里美　キツイね。娘さんに続いて、奥さんもだもん
直明　でも和さん、ホッっとしたって言ってた。瑤子さん、毎日自分を責めて大変だったそうだから
里美　泰介さんにだけ、状況を知らせてたんでしょ
直明　和さんに口止めされてたらしい。みんなにこんな姿見せたくないって。それに絶対元気になるはずだからって
里美　で、元気にはなったけど、なんでああなっちゃったわけ？
直明　入院中、反応は無くても話しかけるように医者から言われて、ベッドの横で美咲ちゃんの話をし続けたらしい。生まれた時のことから、全部の思い出を、毎日
里美　そしたら本人になっちゃったってこと？

和文、ビールと軽いおつまみを持って戻ってくる

和文　びっくりでしょ。僕も最初は何の冗談かと思って。はい（ビールを渡す）
里美　あ、すいません。聞こえてます？ここでこんな話しない方がいいですかね
和文　大丈夫だよ。それに、どのみち今日決着をつけないといけないんだし（直明にも渡そうと）
直明　僕はノンアルなんで
和文　あ、そっか。じゃあ・・・乾杯！

里美　・・・（乾杯とは言えず）
和文　医者にも理解不能らしい。体は元気だから退院して様子を見ましょうってことで、家に連れ帰った。翌朝、久しぶりに食事を作る音で目が覚めて、そしたら瑤子が「おはよーっ」て元気で上機嫌で。訳わからなかったけど、嬉しくて。瑤子が笑ってるのが、嬉しくて

里美　・・・
和文　料理を口にしたら、めちゃくちゃ不味かった
里美　え？
和文　瑤子の作る食事じゃなかった。まだ慣れてない下手くそな、美咲が作る料理だった
里美　瑤子さんの・・・今は美咲ちゃんの中で、瑤子さん自身のことはどう解釈されてるんです？
和文　いないことになってる。一度聞いてみたんだけど、ポカンとしてた。
直明　そうしないと、自分の中で整合性が取れないってことでしょうか？
和文　よく分からないけど。それからは怖くて、踏み込んで聞けてない
里美　学校へは？
直明　行けるわけないでしょ
和文　行こうともしない。ずっと家の中から出ようとしなかった。そこでだけ美咲であることが成立するって思ってるみたいに
里美　でも、ここには来たんですね
和文　うん。驚いた
直明　多分無意識だけど、瑤子さん自身も、このままって訳にはいかないって分かってるんじゃないでしょうか
里美　でも、まだ戻ってこない
和文　ここに来て、みんなの顔を見ただけで、瑤子に戻るんじゃないかって期待したんだけど
直明　これからどうします？
和文　なるべく、無理にこじ開けて、引きずり出すみたいなことはしたくなくて
里美　そうですね
和文　出来れば自分から、自分の方から扉を開けて、出て来てくれたら

ドアが開いて、美咲が顔を出す

一同　・・・
美咲　里美ちゃん
里美　・・・え？
美咲　あ、里美ちゃんって呼んでいいですか？

里美　もちろんです
美咲　おつまみ作ったんだけど、食べます？
里美　えっと・・・美咲ちゃんが？食べたい
美咲　あ、でも、あんまり得意じゃなくて、おいしくないかもだけど
和文　ホントにおいしくないよ
美咲　ちょっとー！
里美　大丈夫ですよ。ちょうどお腹空いてたし
直明　披露宴で食べてきたんじゃないの？
里美　前菜のところで出てきちゃったから

美咲、里美、家の中へ。その後で和文も続く。直明、誰もいなくなると電話をかける。

直明　・・・あ、俺だけど。例の件進展あった？・・・うん・・・わかった。何か動きがあったらまた。悪いね

かけ終わった後、しばし物思いに耽け、缶ビールを飲み干して家に入ろうとしたところで、泰介たちが戻ってくる

直明　お帰りなさい
好江　・・・
直明　聞きました？状況
好江　・・・ホントに？
直明　はい
泰介　なんで俺がウソつくんだよ
好江　だって、そんな話
玉子　全然気が付かなかった
好江　あんた（泰介）、バカじゃないの？そんなシビアな場にこんなの同席させて
玉子　こんなのって何ですか？
泰介　しょうがねーだろ、帰れないっていうから
好江　帰れない？なんで？
玉子　いや・・・
好江　あんた、ちょっともおかしいとか思わなかったの？
玉子　いや、だってまさかそんな、はぁぁぁッ！
好江　なに？
玉子　私未成年だからとか、その時まだ生まれてない、とか、あれボケじゃなかったっ

てことか！？
好江　（直明に）ごめんね、迷惑だったでしょ
直明　全然。むしろ場が和んで助かりました
好江　（泰介に）なんで説明しなかったの？
泰介　どうせ鈍いし、あと却って挙動不審になるだけかなって
好江　それはそうか
直明　なんか作ったみたいですけど、持ってきましょうか？
好江　いや、私ら（自分と玉子）すぐ帰るんで
直明　（会釈）

直明、家の中へ

泰介　そんなわけだから
好江　じゃあ、それ目的の集まりってこと？
泰介　まあ
玉子　それ目的って？
好江　だから、懐かしいみんなの顔見て、昔話とかしてたら、正気に戻るんじゃないかって
玉子　あー
好江　で、どうだったの？
玉子　いや、全然そんな気配は
好江　でもそんなことあるかね
泰介　しょうがねーだろ、現にそうなってんだから
好江　普通他人を認識するときって、自分あってのことじゃない？自分のことは忘れて、娘のつもりでいられるもん？
泰介　分かんないけど、事故の後、自分の方が死ねばよかったって、ずっと言ってたらしいから
好江　それで自分の存在を消しちゃったってこと？・・・切ない。あ、鏡は？
泰介　本人には美咲ちゃんとして映ってるらしい
好江　不思議
玉子　信じるか信じないかは、あなた次第／
好江　お前ふざけてんのか
玉子　すいません
好江　・・・でも、その、瑤子さん？正気に戻っても大変だね
泰介　まあ、でも、誰もそばにいない時に、何かの拍子で戻るよりは
玉子　だよね、最悪・・・（自死とか）

好江　やめろ。・・・誰もいない時って、旦那さんずっとそばについてるんだよね
泰介　・・・まあ
好江　それも大変だけど・・・でも、そういうのって、もっとゆっくり時間をかけた方がいい気も
泰介　だからそんなこと言ってられないんだよ
好江　なんで？
泰介　・・・別に
好江　・・・でもさ、その事故の原因になった、あおってきた張本人は、今どうしてんの？
玉子　そう、しかもお酒入ってたんでしょ？最悪
好江　そいつは今、どっかで涼しい顔してるってこと？ねえ？
泰介　・・・さあ
好江　さっきから、さあ・・・とか、まあ・・・とか
玉子　別に・・・
好江　とか、あんたまだなんか隠してない？
玉子　ゲロっちゃいなよ、ここまで来たら全部ゲロっちゃいなよ
泰介　うるせーなー、お前らさっさと帰れよ

里美がつまみを持ってドアから出て来る

里美　よかったら、食べます？
泰介　いらない！
好江　あー、いいのに。でもありがと・・・あ！
里美　え？
好江　だからか、殴ったの
里美　え、何です？
玉子　今回の喧嘩の原因
好江　里美ちゃん、聞いてよ
里美　聞いてます聞いてます

里美も椅子に座る。

里美　これ頂いていいんですか？
好江　どうぞ。私がちょっと店空けてる時に、うちで飲んでた客が、実は車で来てたってことがわかって
里美　おっとー

好江　この人、代行呼べって言ったんだけど、その客言うこと聞かなくて、で、すったもんだした挙句
里美　殴っちゃったんだ？

好江、つられてビールを開けて飲んでしまう

好江　そりゃね、飲酒運転なんてもってのほかだよ、でも殴るのは
里美　でも、先輩手を出すことなんてあるんですね
好江　だから、今回の件があったからなんじゃないのって、だってそいつ、飲んでたんでしょ？
里美　そうみたいですね
玉子　お姉さん（ビールを指摘する）
好江　・・・あ！
泰介　お前、バカ！
好江　やっぱ！
泰介　お前、飲酒運転批判しながら、てめーが飲んでどうすんだよ
好江　まいったな、里美ちゃんに乗せられた
里美　えー！
泰介　人のせいにすんな。代行呼べ、代行
好江　えー、代行？
泰介　お前な
好江　だって、その客に慰謝料まで払ってさ。ただでさえ無駄な出費してんのに、なんで・・・元はといえばアンタが悪いんでしょうが
玉子　まーまーまー

小窓から美咲が顔を出し、じっと様子を見ている

全員　・・・
好江　・・・え、何？
美咲　・・・喧嘩？喧嘩してます？
好江　ごめんなさいね、うるさかった？
里美　いつものことだから
泰介　悪い、ヒステリーなんだよ
好江　はあ！？
玉子　まーまーまー
好江　だからそれやめろ

美咲、小窓を閉めて外に出て来る。出されたおかずを見て

美咲　あー、全然手え付けてないじゃないですか、やっぱりまずかったんでしょ？
里美　そんなことないですって
美咲　（好江に）どうでした？
好江　まだ食べてない
美咲　お腹が空いてるから喧嘩しちゃうんですよ（どうぞどうぞ）
好江　（食べる）・・・おー！・・・普通
美咲　うぅ！
玉子　正直
泰介　お前・・・（つまむ）あー・・・普通
美咲　ぐぅぅ！
玉子　嘘がつけない二人
好江　ごめんね、うち飲食やってるから
美咲　聞きました。今度行きます
好江　うん、待ってる
美咲　で、なんで喧嘩してたんです？
好江　え？あー・・・この人がうちの客を殴って
美咲　え！？最低
好江　でしょ？
里美　でも事情があるんですよ
美咲　それ
里美　え？
美咲　ちょいちょい敬語入るんですけど、やめてくださいよ１７の小娘に
里美　あー、そっかそっか、ごめん
美咲　事情聞きましょ
好江　えーっと・・・
泰介　・・・車を運転してきた客が、酒飲んでて
美咲　最っ低！
泰介　だろ！？俺、正しいよね？
美咲　でも暴力は
好江　だよねー
里美　さっきも飲酒運転の話になってキレてたけど、やっぱり許せない？
美咲　当たり前ですよ、だって・・・ダメでしょ
好江　うん。絶対ダメ。

美咲　でも、確かに。なんであんなにキレちゃったんだろ？
全員　・・・
美咲　とにかく喧嘩はナシで。せっかく楽しい場なんだし
好江　ごめんなさい
美咲　（改めて）今日はありがとうございます
泰介　・・・何が？
美咲　いや、お父さんずっと元気なかったから。今日のお父さん楽しそう。みなさんに会えて嬉しいんだと思います
泰介　・・・

美咲、車庫の中を改めて見る。全員、その様子をうかがってしまう

美咲　ホントにこんなところで活動してたんですか？
里美　活動っていうか、ほとんど遊んでたけどね
美咲　ふーん、でも楽しそう
泰介　部室とか、そこに行ったら誰かいるっていうのが、妙に嬉しかったりしたよな
里美　授業さぼって入り浸ってましたよね
好江　ここでもお芝居の、、、練習？
里美　稽古？
好江　うん、そういうのしてたの？
里美　はい、公演したこともあったし
好江　ここで？
里美　事実上あれが最後の公演ですよね
泰介　ここの親父さんに頼まれて、客もほとんど親父さんが集めて
好江　へぇ
泰介　瑤子にもファンがいっぱい付いてさ
里美　そうそう、オジサン達に大人気で
美咲　でもその人、もうお芝居やめちゃったんでしょ？
泰介　うん。卒業してすぐ結婚して、子どもが生まれて
里美　しかも出来ちゃった婚
美咲　そうなんだ。でもそっか、子育てが大変になっちゃったんだ？
泰介　全然大変そうじゃなかった。いつも幸せいっぱいの顔してた
美咲　ふーん・・・結局その人は来ないみたいだね
泰介　・・・
好江　あ、これ。食材もちょっと買って来たんだけど、良かったら私もなんか作ろうか
美咲　食べたいですー

泰介　だから帰れって。なんで飲み続けてんだよ
好江　開けちゃったし（美咲に）なんか食べたいものある？
美咲　何でもいい。何でも好き
好江　オッケ、任せろ
里美　手伝いましょうか？
好江　それ台所に立つ格好じゃないよ
里美　エプロン付けますから
美咲　私も手伝いまーす

美咲と玉子を最後に残して、何となく全員部屋の中へ

玉子　さて、私はそろそろ帰ろっかな？
美咲　えー！なんでよ。せっかく友達になったのに
玉子　いやー、なんか・・・疲れちゃった
美咲　えー、さっきの続き聞きたい。元カレの家具デザイナーの話
玉子　あー、それはもう終わった恋だからさ

美咲、中の様子をうかがってドアを閉める。

玉子　ま、結局。当時は私も若かったから、彼の全部の時間を欲したわけね。男を遊ばせる余裕ってものがなかったと言えば／
美咲　玉ちゃん、玉ちゃん
玉子　ん？ん？
美咲　私らもうダチじゃん。ね
玉子　うん
美咲　だから嘘はナシ。腹割っていこうぜ
玉子　うん・・・え？なに？疑ってんの？ホントに付き合ってたんだって
美咲　違う違う、そうじゃなくて。みんなでなんか隠し事してるよね
玉子　え？
美咲　なんか私を取り巻く空気っていうの？腫物にさわるみたいな印象があるんだけど
玉子　そお？
美咲　玉ちゃんはそんなことないんだけど、なんか知ってる？
玉子　いやー・・・
美咲　あと、みんなやたら昔の話を私にしてきて、特に瑤子さんって人の話。で、私の反応を固唾を飲んで見守るみたいな
玉子　・・・考えすぎじゃないの？

美咲　・・・ひょっとしてなんだけど
玉子　・・・うん
美咲　その瑤子さんって・・・私のお母さんなんじゃないかな？
玉子　・・・ん？ん？お母さんっていうのは、美咲ちゃんのお父さんの奥さんってこと？
美咲　当たり前じゃん
玉子　あー・・・
美咲　正解？
玉子　いや、あの・・・美咲ちゃんってお母さんのこと、何にも覚えてないんだっけ
美咲　うん。全く。今まで気にしたことないんだよね。それも変な話だよね
玉子　変。すっごく変
美咲　私、半年くらい前に事故にあったらしいのね。それも全然覚えてないんだけど
玉子　うん、それは聞いた
美咲　もしかして、それが原因で、ホントはいたはずのお母さんのことを忘れちゃって。お父さんたちって、お母さんのことを思い出させようとして、私をここに連れて来た、とか？
玉子　惜しい！
美咲　惜しい？やっぱりなんか知ってるんだ？
玉子　あ、いや
美咲　何？惜しいって、どのへんまで合ってるわけ？
玉子　・・・えーっと・・・瑤子さんが、美咲ちゃんのお母さんであることは、間違ってない
美咲　やっぱそうなんだ！じゃ正解じゃん。それが一番肝心なんじゃん
玉子　いや、そうなんだけど。もっと根本的なところで
美咲　最初からそう言やあいいのに、なんであの人達は。ありがと、それさえ分かれば後はお父さん達に直で聞くから
玉子　あー、待って待って
美咲　大丈夫、玉ちゃんがチクったってことは、絶対言わないから

美咲、部屋の中へ

玉子　チクった？私、チクったことになってる？えーっと、今どういう状況？でも逆にいい方向に向かって・・・いや、絶対余計なこと言った、絶対怒られるパターン、あー、やっぱりすぐ帰るんだった

玉子が悶絶していると、男（壮太朗）が一人庭の方から入ってくる

壮太朗　あの
玉子　ビックリした、・・・はい
壮太朗　さっき美咲さんのことを話してたみたいですけど、あ、すいません、聴こえちゃって。それって、亡くなった山根美咲さんのことでしょうか
玉子　・・・はい
壮太朗　やっぱり。じゃあ、こちらにそのご家族の方って、来てたりとか・・・和文さん
玉子　あー・・・サークルのお友達ですか？
壮太朗　サークル？
玉子　みんな集まってますけど、演劇部仲間の
壮太朗　・・・いえ
玉子　・・・誰か呼んできます？
壮太朗　あ・・・いえ。大丈夫です・・・大丈夫です

壮太朗、消え入るように庭から出ていく

玉子　・・・え、何？気持ち悪っ！でもちょっといい男だった・・・そんなこといいや、今のうちに帰ろ

中から、泰介と直明が勢いよく出て来る

泰介　・・・なんで急にあんなこと言い出したんだろ
直明　ちょっと予想外でしたね
泰介　アイツの頭の中どうなってんだよ？訳わかんねーな（玉子を見る）
玉子　・・・じゃ、私先に帰ります
泰介　待って待って・・・お前さ
玉子　はい
泰介　なんか余計なこと言った？
玉子　余計なことっていうのは？
泰介　今瑤子・・・美咲ちゃんだけど、瑤子のことを母親だって言い出してるんだけど
玉子　・・・ええ！？そうなんですか？
直明　いや、でも間違ってはいないですよね
泰介　え？・・・まあ、そりゃそうだけど
直明　ある意味前進と考えていいんじゃないでしょうか。今まで何の反応もなかったのに比べれば

玉子　確かに
泰介　そうか？
直明　結果的には瑤子さんが今、自分のことを知りたがってるわけだし
泰介　母親としてだけど？
直明　それでも向こうから積極的に話を聞きたがってくれるなら、ありがたいんじゃないですか
玉子　ホントそう！前進！
泰介　・・・お前ホントに余計なこと言ってない？
玉子　私が！？(笑)何を証拠にそんな・・・世迷言も休み休み／
泰介　コイツだ。てめーこの野郎
玉子　ごめんなさいごめんなさい！だって、詰め寄られて、圧が、圧がすごくて

和文が出て来る。続いて美咲も後をついてきて、更に中にいた全員が二人の後を追って外に。佇む和文の様子を美咲が食い入るように見つめている

和文　・・・うん、だからちょっと待って、一服してから話すから
美咲　うん、だからどうぞ
和文　(タバコを探して、体をまさぐるが)・・・あ、タバコやめたんだった
泰介　とっくの昔にな
美咲　何てんぱってんの？
泰介　・・・
里美　美咲ちゃん、お父さんにちょっと時間あげてくれない？
良平　どういう状況？さっぱり分からないんだけど
亜季　黙って
美咲　心配しなくて大丈夫だって、もう大体の予想はついてるから
和文　・・・え、予想って？
美咲　お母さんって、だから瑤子さんって、もう亡くなってるんでしょ？
和文　・・・
美咲　だから今日ここに来るはずもない
和文　・・・！
美咲　(和文の表情から)・・・え、違うの？・・・・え、生きてるの？

和文、どうにも言いようのない気持ちになり、美咲の両手を取り、そこに自分の額を預ける

美咲　え、わかんない。どっちなの？

和文　・・・生きてる。瑤子は、今もちゃんと生きてる
美咲　そうなの？じゃ、ホントにここにも来るってこと？
和文　・・・来る。必ず戻って来る
美咲　え、でもなんで一緒にいないの？離婚したの？
和文　してないよ
美咲　じゃあなんでお母さんは美咲のそばにいないの？なんで？
和文　・・・なんでだろう・・・なんでだろうね
泰介　美咲ちゃん、後でお父さんちゃんと説明するから、先に部屋に行って待っててくれないかな？
美咲　・・・わかった

美咲、家の中へ。泰介、好江と里美に、よろしくという意味合いの目くばせ

亜季　良ちゃんにも説明するから。ごめんね、黙ってて

和文、泰介、直明、玉子を残して、全員中へ

和文　・・・まいったな。これはやっぱり、罰なのかな
泰介　罰ってなんだよ。お前が何やったよ
和文　（無言で泰介を見る）・・・
泰介　（意を受け取り）バカ！どこの誰がお前のこと責められるんだよ
直明　こうなったら、もう全部話して聞かせた方がいいんじゃないですか
和文　・・・うん。そうかもしれない。でも、怖くて。現実に戻ったら、今度こそ瑤子は壊れてしまうような気がして
直明　でも、そのために集まったんでしょ
和文　そうなんだよね。やっぱりダメだな、僕は
直明　ホントは早ければ早いほどいいんです。タイミングを逸すると、それこそ瑤子さんを独りぼっちにすることになりますよ

庭の方からさっきの男（壮太朗）が再び姿を現す

玉子　あ、さっきの
壮太朗　和文さん
和文　壮太朗くん？なんでここに？
壮太朗　和文さんじゃないですよね
和文　・・・何が？

壮太朗　金田仁志のことです。違ってたらいいんです、それだけ確認したくて
和文　・・・
壮太朗　・・・やっぱり、やっぱりそうなんですか？

ドアが開いて、美咲が出て来る

美咲　ねえ、まだ？（壮太朗に気付く）・・・！
壮太朗　・・・よかった、退院されてたんですね
美咲　壮太朗さん！！

美咲、笑みをたたえて壮太朗に駆け寄ろうとするが、すぐ立ち止まる

美咲　・・・壮太朗さん？

美咲、少し混乱したようになり、頭を押さえてフラフラを数歩歩いた後、くずれるように倒れる。和文、受け止める
―暗転―

暗闇の中、工具を使って作業しているような音が聞こえる。美咲が目を覚ますと、車庫の隅で美咲に背を向けて自転車の修理をしている男がいる

美咲　・・・あの
男　（作業を続ける）
美咲　あの・・・誰ですか？
男　（振り向く）・・・瑤子ちゃん
美咲　・・・瑤子じゃないです。美咲です

男、じっと美咲を見つめた後、自転車の空気入れを持って瑤子に近付き、座ってる瑤子の手にチューブの端を握らせると、ポンプを動かす。と、美咲、空気が入ったみたいに少しづつ立ち上がる

美咲　・・・

男、無言でドアの方を指差す。美咲、わけもよくわからないままドアの前に。意図を問うように男の方を見る

男　（開けろ、という意思表示）

美咲、恐る恐るドアを開けてみる、と、部屋の奥から光が差して、和文達が名前を呼ぶ声がする「瑤子、瑤子さん、瑤子ちゃん、瑤子、瑤子先輩・・・」

美咲　・・・

しばらく放心したように、みんなの声を浴びるが、一旦閉める。また開ける、「瑤子さん、瑤／」すぐ閉める。遊ぶみたいに何度か繰り返す

男　そろそろ起きないと

美咲　・・・

もう一度ゆっくり開ける。再びみんなが色んな場面で瑤子を呼ぶ声が聞こえて来るが、受け入れるのを拒むように、またゆっくりドアを閉めようとする。と

少女（声）　お母さん

美咲　・・・！！

少女（声）　お母さん

美咲、少女の声に導かれるように、ゆっくり、中に入っていく

―暗転―

―明転―

壮太朗を端にして、泰介、好江、直明、良平、亜季の五人が話を聞いている

泰介　NGO？

壮太朗　はい。今はラオスで子どもたちの教育支援や、職業支援の活動をしています

好江　へえー、立派だね

壮太朗　全然そんなことは

亜季　ラオスってどこ？

良平　東南アジア。タイの隣

壮太朗　たまたま帰国していた時に、ボランティアに興味がある子がいるから、話を聞かせてあげてほしいって言われて、紹介されたのが美咲ちゃんでした。

直明　それはいつの話？

壮太朗　今年の三月の頭くらいです

泰介　事故に遭う一か月くらい前か

壮太朗　何回か会って話をしたんですけど、彼女、自分も行きたいって言いだして
好江　ラオスに？
壮太朗　はい。いつもすごく熱心に僕の話を聞いてくれてたし、嬉しくて、じゃあ高校を卒業して大学生になったら、いつでも遊びに来てって言ったんです。そしたら、いや、今行きたいんだって
好江　卒業を待たずに？そりゃダメでしょ
壮太朗　僕もそう言ったんですが、彼女譲らなくて。私は思い立ったその時に行動したいんだって強く訴えてきて
亜季　瑤子先輩もそうでしたよねー
良平　そうなんだ？
亜季　行動力の人だったから
直明　思い立ったが吉日、が信条だったよね
泰介　それで？
壮太朗　絶対ダメだって。大体僕がやってるのが教育支援なのに、彼女の教育を受ける機会を奪ってどうするんだっていう
好江　そりゃそうだ、矛盾しちゃうよね
壮太朗　でも彼女の真剣な目を見て、気付いたんです・・・あー、この子は・・・僕に恋をしてしまっている、って
一同　・・・

一同、各々で一瞬固まった後、互いの目を見交わす

壮太朗　過去にも何度かありました。僕はなまじ顔がいいということもあって、昔から若い女の子にもてるんです。もうすっかりおじさんになって、そんな機会もめっきり減っちゃったけど、海外で働いているっていうのが、魅力に拍車をかけたのかもしれません。僕を見る彼女の目は・・・男の尻を追う、一匹の雌のそれでした
泰介　うん、一旦やめて

泰介、ポケットからBluetoothイヤホンを出して、壮太朗に渡す

泰介　コレ付けて
壮太朗　あ、はい。イヤホン？
泰介　（スマホを操作しながら）今から曲を流すから、後で感想聞かせてくれる？
壮太朗　わかりました

壮太朗、耳にイヤホンを装着。泰介、音を鳴らす

泰介　俺の声聞こえる？
壮太朗　？

泰介、壮太朗にOKのサインを出して、そのまま聞いといて、とマイムをしてから、一同に向かって

泰介　コイツ大丈夫かな？
直明　殴りそうになりました
好江　立派な人だと思ったんだけど、違うのかね
亜季　でもウソは言ってないんじゃない？確かにマスクはいいし
良平　そお？

一同、壮太朗を再び見る

壮太朗　？
泰介　（続けて聞いてて、のマイム）
直明　だとしても自分で言うんじゃねーよ
好江　でも最近はそうじゃない？福山だって（真似て→）「僕スーパースターだからさぁぁ」
直明　それは福山だから
泰介　雌って言ったよ。そんなワード昭和世代のジジイですら、恐ろしくて使えねーよ
良平　基本海外で生活してるから、最近の日本のコンプライアンス事情に疎いんじゃない？
好江　でも海外ってもっと厳しいんでしょ。ラオスってどうなんだろ？
泰介　知らないよ
直明　普通にネジが足りてないだけですよ
亜季　でも私は結構嫌いじゃない
良平　・・・！！
好江　とりあえず話の続き聞こうよ

泰介、壮太朗に「もう取っていい」のマイム

泰介　どうだった？
壮太朗　結構うるさかったです
泰介　だろうね

牡太朗　あとギターは悪くなかったんですが、ベースがもっと
泰介　それはいいから。続き
牡太朗　はい。どこまで話しましたっけ？
泰介　美咲ちゃんが君に個人的感情を抱いていて
牡太朗　個人的？・・・あ、そうです。僕にぞっこんだったわけです
直明　（舌打ち）
牡太朗　そういうのには慣れてはいましたが、このままじゃいけないって思って、お母さんとも相談して
泰介　お母さんって瑤子？
牡太朗　はい。で、美咲ちゃんとはもう連絡を取らないことにして、僕はラオスに戻りました。それから一か月くらいして、美咲ちゃんを紹介してくれた日本にいる友人から、美咲ちゃんが事故で亡くなったっていう話を聞いて
良平　その、事故っていうのは？
亜季　交通事故。瑤子さんが運転する車が、スピードの出し過ぎで、電柱に激突したのうわ。急いでたの？
良平
直明　逃げてたんですよ。飲酒運転の車にしつこく煽られて、振り切ろうとして事故に遭った
好江　それはもう殺人だよ
亜季　なのに罰金刑で終わりってどういうこと？
良平　え！？変だよそれ
泰介　ふりきったその先で起こった事故だったから、直接には絡んでないってのもあると思う
好江　そんなの理由になる？
泰介　話進まないから。それで？
牡太朗　すぐ帰国しましたけど、その時にはもう葬儀は終わって、瑤子さんも入院していて、和文さんから話を聞いた僕は、居ても立ってもいられない気持ちになって、和文さんと二人でその男に会いにいったんです
好江　煽り運転のそいつ？
牡太朗　はい。それが金田仁志です。せめて見舞いに来て、瑤子さんに謝罪するように言いましたが、法律上自分は罪を償ったの一点張りで。鼻であしらわれました
好江　殺してやりたい
泰介　おい
直明　同感です
泰介　・・・
牡太朗　結局何も出来なくて。僕はまたラオスに戻ったんです。それからは和文さんと連絡を取ることもなく、仕事に没頭する日々だったんですが、つい五日前に、

その金田が深夜、公園の階段で突き落とされて、意識不明の重体っていうニュースをネットで目にして

良平　え！？誰に？

壮太朗　・・・まだ分かってないんです。でも、無性に胸騒ぎがして、今日また日本に来たんです

亜季　行ったり来たり大変だね

好江　どうせそんなヤツだから色んなところで恨み買ってるんでしょ？不謹慎承知で、申し訳ないけど私としちゃ、その犯人を表彰してやりたいくらいだよ

一同　・・・

好江　（違和感を感じる）・・・ん？

好江、良平を除いた一同の雰囲気を受け、最も身近な容疑者たりうる存在に今更ながら気付く。小窓に和文の影が映っている

好江　・・・え？まさか、違うよね？・・・（泰介に）ちょっと、なんで黙ってんの？

和文と、その後ろから里美が、ドアを開けて中から出て来る

和文　突き落とそうとしたわけじゃないんです。苦しい言い訳に聞こえるけど、もみ合ってるうちに、金田が足を滑らせて。彼、その時もお酒が入ってたから

好江　・・・

壮太朗　やっぱり、和文さんだったんですか

亜季　瑤子さんは？

里美　まだ目を覚まさないけど、心配ないと思う。今、玉ちゃんが見てくれてる。責任感じてるみたい

和文　玉ちゃん関係ないのに。・・・（好江に）すみません。こんなことにご主人を巻き込んでしまって

泰介　別に巻き込まれてねーよ

良平　え？え？（亜季）知ってたの？

亜季　もちろん

和文　すみません、奥さんにも迷惑をかけて

亜季　だからかかってませんって

好江　・・・そっか。そうなんだ。ちょっとビックリ。でも、とにかく、犯人は、犯人って！ごめんなさい、まだ特定されてないんでしょ？

和文　（首肯）・・・

好江　だったら、だったら今のうちに、早くしないと

泰介　お前落ち着けよ
好江　落ち着いてる場合じゃないでしょ。あれ、あれしないと、なんだっけあれ
良平　自首！
好江　そう、それ！
良平　犯人が特定されて逮捕状が出ちゃうと、手遅れになっちゃうから
好江　そう、だって殺意はなかったわけでしょ。だったら大した罪になんないよ
良平　でも、逮捕状が出てるかどうかなんて、僕らには知りようがないし
直明　まだ出てないです。さっき奥さんが言った、色んなところで恨みを買ってるっていうのはその通りで、今警察は別の線を当たってます
好江　そうなんだ、よかった、じゃあ今のうちに早く警察に
泰介　警察にはもう相談したよ
好江　あ・・・そお。ふーん・・・じゃあ、もうじき来るの？パトカーとか？
直明　来ませんよ。まだ上には上げてないので
好江　上？
里美　彼、警察の人なんです
好江　・・・！
直明　すみません。隠してたわけじゃないんですが
好江　嘘だ、だって公務員だって言ってたよ、公務員だ！警察って公務員だった！
直明　金田の件を担当している同僚に、捜査の状況を逐一確認してます。まだ大丈夫ですが、和さんに捜査の手が回るのも時間の問題だと思います
好江　じゃあやっぱり急がないと、なんで・・・そっか、瑤子さんをこのままの状態にして、ぶち込まれるわけにはいかないってことか！
泰介　言い方
好江　あー、ごめんなさい！
和文　出頭すれば、いつ出て来れるか分からないので
壮太朗　　でも、もし瑤子さんが正気に戻っても、待ってるのは美咲ちゃんを失った現実と、その上・・・
好江　瑤子さん、独りぼっちになっちゃうじゃない
和文　・・・
里美　バカ！！
和文　！！
里美　なんですぐに救急車呼ばなかったんですか。だって故意じゃなかったんでしょ？
好江　そうだよ、そしたら大事にならなかったのに。バカじゃないの！？
泰介　そうなんだよ、お前バカなんだよ、バカ！
和文　・・・押せなかった
里美　え？

和文　すぐに119番しようとしたんだけど、どうしても番号を押せなかった
良平　そりゃ動揺するよね
和文　（そうじゃなくて）押したくなかった。美咲が人生を奪われて、瑤子が苦しみ続けてるのに、なんでコイツは助けなきゃいけないんだろうって・・・横たわって動かない金田を見て、何にも感じなかった
一同　・・・
和文　気が付いたら全力疾走してた。ビュンビュン風を切って。あんなに早く走ったことはなかったんじゃないかな。爽快だった。今になってみれば、初めからアイツを殺すつもりだったんじゃないかって／
直明　そんなこと警察では、冗談でも口にしないでくださいね
和文　・・・ごめん。あー、バカだな。ホントにどうしようもない・・・バカだ
亜季　その金田っていうのが助かる見込みは何パーくらいなの？
直明　半々ってところかな。医者の話じゃ今夜あたりが分水嶺だろうって
亜季　分水嶺って？
良平　要するに今夜が山ってこと
壮太朗　当然量刑にも影響しますよね
好江　瑤子さんの方は？まさかこのまま目を覚まさないってことはないよね？
里美　さすがにそれは（ないと思う）
亜季　大体なんで急に気を失ったわけ？
壮太朗　僕を見て倒れたみたいでしたけど
和文　もしかしたら、事故の日のことを思い出したのかもしれない
泰介　なんで？
和文　壮太朗くんに会ってから、美咲はラオスに行きたいって言って聞かなかった。あの日もそのことで喧嘩して、美咲が家を飛び出していって、事故にあったのは瑤子が美咲を見つけ出して、家に帰る途中のことだった。だから
壮太朗　喧嘩の原因で、つまりは事故の原因でもある僕を見て、瑤子さんが拒否反応を起こしたってことですよね
和文　君が事故のことを気に病む必要は全くないからね
壮太朗　でも、そもそも僕が美咲さんに会ってなければ
泰介　そういうのをたらればって言うんだよ
好江　ホントだよ。言い出したらキリがないから
直明　でもそれで気を失ったんなら、瑤子さんの部分が徐々に顔を出し始めてるってことになりますよね
里美　もしかしたら目が覚めたら瑤子さんに戻ってるかも
泰介　そんなうまくいけばいいけど。今は待つしかない

しばしの間

好江　・・・お腹空かない？結局私何にも作ってない
良平　あ、シチューを仕込んであるので
好江　じゃそれと、なんか付け合わせ作るから。（壮太朗に）食べるでしょ？
壮太朗　朝から何にも食べてません
好江　ダメだよ、とにかく食べないと始まらない
亜季　（直明に）あ、先輩、これノンアルのやつ間違って開けちゃったんだけど、飲んで

好江を先頭にぞろぞろと家の中へ入っていく。たまたま最後に和文、亜季、良平、壮太朗が残る

和文　でもよくこの場所がわかったね
壮太朗　ＧＰＳを辿りました。美咲ちゃんのスマホが生きてるかもしれないと思って
和文　うん、確かに電源は入れっぱなしにしてるけど。え？そんなので分かるの？
亜季　位置情報アプリでしょ
壮太朗　はい
和文　アプリ？
良平　仲のいい友達同士や恋人でお互いの居場所が分かる、そういうサービスがあって
和文　あー・・・え、恋人？
壮太朗　違いますよ(笑)
和文　だよね(笑)
壮太朗　美咲ちゃんが一方的に僕を好いていただけです
和文　あぁ・・・ちょっと待って
良平　なんで余計なこと言うかな
和文　そんなこと、美咲から何も聞いてないんだけど
壮太朗　普通お父さんにそういうことは話さないと思いますよ
和文　・・・（亜季達を見る）
亜季　そうらしいですよ
良平　嘘じゃなければだけど
壮太朗　どうして僕が嘘をつくんですか
和文　え？だからあんなに行きたがってたってこと？えっと、どこだっけ？
壮太朗　ラオスです
和文　君がいるからってこと？
壮太朗　そうですね
和文　・・・

牡太朗　でも安心してくださいお父さん
和文　お父さんってやめて
牡太朗　僕は十代の子にはやたらもてますが、分別がつく年齢になると、哀しきかなみんな離れていきます
良平　それはなんで？
牡太朗　子どもだってことがばれちゃうんでしょうね。僕はいつまでたっても夢追い人だから
良平　（亜季に）自分に優しい人だね
亜季　おもろい。ずっと見ていたい
牡太朗　だからおたふく風邪みたいなもんです
和文　そっか・・・たしかにそういう時期あるよね
牡太朗　さ、シチューをいただきましょう
和文　そうだね（行こうと）・・・間違ったことにはなってないよね？
牡太朗　というのは？
亜季　体の関係ですよね？
和文　ハッキリ言わないで！
牡太朗　（悲しげに首を振り）僕にとって彼女は妹みたいな存在でした。そんなこと出来ると思いますか？
和文　・・・すまない、最低だな僕は
牡太朗　いえ
和文　滑稽だな。もう美咲は亡くなってるのに
牡太朗　親ってそういうものだと思います
和文　・・・さ、食べよう（行こうと）
牡太朗　（後に続きながら）それに僕にとって女性はオーバーサーティからなので、むしろ瑤子さんの方が俄然ありです

和文、牡太朗をドアの外に押し出す

良平　だからなんで余計なこと
亜季　おもろい。たまらん
牡太朗　どうしました？お父さん
和文　お父さんってやめろ！君はなんか引っ掛かるな。よく分からないけど、すごく引っ掛かる
牡太朗　なにがですか？あ、瑤子さんとは何にもありませんよ
和文　当たり前だよ！
牡太朗　どちらかと言えばという話です。例えば、美咲ちゃんと瑤子さんが同時に僕に

交際を申し込んできたとして
和文　申し込まないよ！
壮太朗　例え話です。落ち着いてください。その場合、僕は美咲ちゃんではなく、間違いなく瑤子さんを選ぶであろうという、つまりはそういうことです
和文　（よく分からず、亜季達を見る）
亜季、良平　（分からない、という意で首を振る）
壮太朗　で、ここからが肝心なんですが
和文　・・・！！
壮太朗　僕にとって女性は四十歳までです。惜しむらくは瑤子さんもタイムリミットです。だから、和文さんは何も余計な心配をする必要はないんです。杞憂です
和文　・・・彼ってこんな人だっけ？
亜季　私らは今日会ったばっかりなんで
良平　一応確認なんだけど、わざと怒らせようとしてるわけじゃないよね？
壮太朗　（キレる）どうして僕がそんなことをするんですか？！！
良平　怒った
亜季　真剣なんだよ。真剣にズレてる
壮太朗　・・・でも確かにこういうこと多くて。僕も悪いのかもしれませんね。言葉の行き違いなのか、色んな事が相手にねじくれて伝わってしまう。それで日本を離れたっていうのはあります
和文　ラオスでは平気なんだ？
壮太朗　行き違いにはなりません。言葉が通じないので
良平　それでよく支援出来るね
壮太朗　（胸を叩いて）大事なのはここです。言葉は関係ありません
和文　・・・とにかく、邪な気持ちはないんだよね？
壮太朗　（悲しげにため息をついた後、力強く）・・・はい
和文　引き止めてごめん、ご飯食べて
壮太朗　もうペコペコです。お邪魔します（家に入っていく）
和文　・・・すごく疲れた
亜季　悪い人じゃないですよ。空気が読めないのと、病的なまでに正直なのと、あと言葉のチョイスが間違ってるだけで
和文　深刻だよそれ
亜季　（何かメモしてる良平に）ネタ帳？
良平　うん、面白いキャラクターだから、メモっとこうと思って
和文　小説ですか？
亜季　瑤子さんのことはネタにしないでよ
良平　・・・当たり前でしょ？何言ってんの？

直明と泰介が出て来る。直明、さっきの缶ビールを手にしている

亜季　もう食べ終わったの？
良平　味、変じゃなかったですか？
直明　シチュー、全部捨てるって言ってます
良平　えー！なんで？
直明　言いようのない異臭を放っていて、
泰介　何かと何かが喧嘩して、分離してます
良平　（家に入っていく）だってハウスだよ
亜季　（後に続く）関係ないから。だからやんなくていいって言ったのに
泰介　ん？急に疲れてない？なんかあった？
和文　ちょっと・・・結局父親なんて何にも知らないんだよ・・・あ、そういえばお子さん、今何歳だっけ？
直明　何です急に。今八歳で、小学二年生です
和文　あー、一番かわいい時だね
直明　さあ。うちの子は常にかわいかったので
泰介　男の子だったよな？
直明　この間、奇跡的に父兄参観に出られたんですよ、作文の発表があって、「パパは警察官で街の平和を守ってます」って
泰介　うわー、たまんねーな
和文　大丈夫だよね？
直明　・・・？
和文　今回のことで、立場が危うくなったりしないよね？
直明　なんでですか？
和文　だって、犯罪者に情報を流してるわけだから
泰介　犯罪者とか言うな
直明　問題ありません。それにどうせ辞めるつもりだったし
泰介　え？仕事を？
和文　どうして？
直明　疲れちゃいました
泰介　でも子供もまだ小さいのに
和文　やっぱり、僕のせいじゃ
直明　違いますよ。それにね、こんなの物の数に入りませんよ
泰介　何が？警察内部の話？
直明　はい。パワハラはもちろん。組織ぐるみの裏金作りから、収賄、横流し、証拠の

捏造まで
泰介　へー
直明　この間は不正を内部告発しようとした同僚が、免職に追いやられました。さすがにうんざりです
泰介　まー色々あるってのはニュースで見るけど
直明　そんなのごくごく一部ですよ
和文　ホントに辞めるの？
直明　田舎に帰って、親父の農業を手伝おうと思います
泰介　・・・そっか。あ、でも、そっちの方が向いてるかもな
直明　ホントはね、僕は必殺仕事人になりたかったんですよ
泰介　急にどうした？酔ってる？
直明　ノンアルで酔えるわけないでしょ！酔わなきゃやってられないのに、こんな夜・・・なんの話だっけ？
和文　仕事人・・・
直明　そう、法の下で裁けない悪人をね、シュピーン！ブサー！ブサー！って(笑)
　　でも現実は何やってんだか。何が街の平和を守ってるだよ
泰介　ホントに酔ってない？
直明　せめて身近な人たちだけでも守りたいって思ってた矢先に、何ですかこの仕打ちは？
和文　本当に（申し訳ない）
直明　謝るんじゃないよ！あんた謝れば済むって思ってる節がある！
和文　そ、そんなことないよ！
直明　和さんはね、どう考えたって被害者ですよ。善良な一般市民ですよ。誰が見たってね、そうです。瑤子さんも・・・そんな人達を、大事な仲間を、守るどころか、何で刑務所に送る側の人間として関わらないといけないんですか。見届けないといけないんですか？冗談じゃないですよ！・・・ホントに、冗談じゃない

小窓が開いて、亜季が顔を出す

亜季　なんか盛り上がってる？
直明　盛り上がってないよ！・・・最近のノンアルはすごいですね。ちゃんと酔えるんだ
泰介　そんなわけないと思うけど
直明　二階のベッドって、まだあるんですか？
泰介　あー、俺が使ってたからな
直明　ちょっとだけ横になります。何かあればすぐ起こしてください

直明、二階に上がっていく。亜季家から出て来る。続いて里美も

亜季　相変わらず弱いな
泰介　あ、お前
亜季　ほんのちょっと垂らしただけだよ
泰介　何やってんだよ
亜季　色々溜まってんじゃないかなって。酔わないと吐き出せないタイプだから
泰介　向こうは今どうなってんの？
里美　シチューがダメになったんで、壮太朗って人がラオス料理を作り始めてるけど
泰介　ラオス料理ってどんな？
里美　ラープとかカオニャウ？あとモックパーとか
泰介　全然わかんないんだけど
亜季　大体辛くて酸味があって、あと甘いみたいな？
里美　割と日本人の口にも合いますよ。今日挙式だった子もそっち系が好きで、料理もエスニックだった、斬新
和文　それ途中で抜けて来てよかったの？
里美　あ、全然
和文　なんかごめんね
亜季　また謝ってる
和文　そうだった
里美　いても何の役にも立ちませんけど
和文　そんなことないよ
里美　ここでもやりましたよね。和さんと瑤子さんの結婚披露パーティ
和文　・・・うん。親父さんに指輪の交換まで再現させられて
亜季　うちのお父さん、仕事で披露宴行けなかったから
和文　懐かしいねー、随分昔のことみたいだ・・・ちょっと瑤子の様子見て来る

和文、家の中へ入っていく

亜季　披露宴、なんで途中で抜けてきたんです？
里美　ん？あー、なんとなく
泰介　そうだ、その後二次会の幹事も任されてるからって。そっち大丈夫なのか？
里美　全く問題ないです
亜季　ウソなんでしょ？
里美　・・・
泰介　何が？

亜季　ここに来たくなかったから、適当にでまかせ言ったんだよ
泰介　何言ってんだよ、そんなわけないだろ
里美　あ、そういうことか。どうりであたりが強いと思った
泰介　え？
里美　全部わかってんだ？昔からそういうとこ目ざといよね
泰介　え、披露宴・・・
里美　それはホントですよ。でも別に私が出席しなくても、どうってことないし、スピーチするわけでもなければ、まして二次会の幹事なんて・・・すみません
泰介　なんで？
里美　泰介さんから、和さん達の話を聞いた時はビックリして、急だったし
泰介　悪い、口止めされてたからな
里美　信じたくなくて、しかも和さん逃亡中みたいなこと言うから。私が行ったところで何にも出来ないなって。でも、それも多分ウソっていうか言い訳で。見たくなかったんですよ。二人のそんな姿。ただ私が見たくなかっただけで
亜季　まだいいように言ってません？関わるのがめんどくさかっただけじゃなくて？
里美　厳しいなー。でも、そうかもね
亜季　犬を捨てといて「いい人に拾われてね」みたいな
里美　ぐあぁぁぁぁ
泰介　やめろ！それはまた別だろ
里美　でも、当たらずとも遠からずな気が
亜季　だから、なんで来たのかなって思って
泰介　そうだよ、ここにいるじゃねーかよ
里美　思い出しちゃって、二人の結婚式。あの時はみんなでハンドベルやって
泰介　あー、ひどかったなあれ
亜季　何の曲か謎でしたね
泰介　なんだっけ？
里美　忘れました
泰介　直明のせいだよ。アイツ酔っ払って
里美　そう、もうベロンベロンで
亜季　でも大うけでしたよね
里美　そんなこと思い出してたら、涙が止まんなくなっちゃって。私、何やってんだろ、何でここにいるんだろって。大事な人達が苦しんでる時に、なに自分勝手な理由で目を背けて、ウソまでついて
泰介　・・・
里美　こっちは関係ないことで泣いてるのに、もらい泣きする人までいて、これは新郎新婦にも申し訳ないなって。で、飛び出してきちゃいました

泰介　そうか
里美　ここ遠いんですもん。だから来る間にも昔の色んなことがよぎって。ずっと泣いてました
亜季　（里美の肩に手を置き）気付いてますか？涙が止まらなかった理由は・・・年齢ですよ
里美　そろそろ殴ってもいいかな
泰介　まあまあまあ
里美　でも虫のいい話ですよね。今の今までろくろく思い出したりしなかったくせに
泰介　俺も似たようなもんだよ。いつも自分のことでいっぱいいっぱいで。二十代は店を持とうって必死で。持ったら持ったで三十代はつぶさないように必死で。気付いたらこの年だよ
亜季　昔の友達とか会えなくても、勝手に元気でやっててくれたらそれでいい、って思うよね
泰介　和や瑤子ともずっと連絡取ってなかったしな
亜季　そこはまた別の話でしょ？
里美　うん
泰介　何が？
里美　何がって
泰介　（気付いて）・・・何年前の話だよ
亜季　結婚式の時も暗い目してた
里美　そうそう
亜季　少なくとも和さん達は、連絡しないようにしてたんじゃない？
里美　無駄に気遣いの人だからね
泰介　それはねーだろ
亜季　私と別れたのだって、結局瑤子さんのことが諦め／
泰介　もういいって、やめろ！うちのヤツが聞いたらまためんどくさくなる

好江、勢いよく家の中から出て来る

泰介　いや、違う違う違う！だからそれも大昔の話で
好江　瑤子さん起きたよ
里美　え？
泰介　どっちで？
好江　ん？どっちって？
里美　瑤子さんか美咲ちゃんか
好江　あ、そうか、分かんない。でもちょっと様子がおかしくて

泰介　なんだよ？
好江　なんか、誰か探してるみたい

美咲、家の中から出て来る、誰かを探すようにみんなの顔を見て、いないことがわかると、また目を泳がせ、誰かを探す。後から和文達が出て来る

和文　・・・瑤子
美咲　（和文を見る）・・・
和文　・・・美咲？
美咲　・・・どっち？
和文　・・・
美咲　あー、もう、わけわかんない・・・う、なんか気持ち悪い

小窓から壮太朗が顔を出す

壮太朗　大丈夫ですか？

美咲、声の主の方を見る、が、亜季が小窓を外から閉める

壮太朗　（中から）何ですか？
亜季　また気を失ったらダメだから
好江　大丈夫？吐く？
美咲　（首を振る）お水
好江　玉！

玉子、水を取りに走る

泰介　誰探してんだ？
美咲　・・・夢の中で、呼ばれて
泰介　誰に？
美咲　・・・わかんない・・・でも・・・お母さんって
和文　・・・！
美咲　お母さんって！（笑）・・・あれは、誰？
和文　・・・美咲だ
美咲　・・・私？
和文　（首を振り）君は・・・瑤子だ

美咲　・・・じゃあ美咲は？
和文　もう、いない。亡くなったんだ
美咲　・・・

玉子、水を持って来る。2リットルサイズ

好江　でかいよ！
玉子　これしかなくて
泰介　お前コップに入れるとか／

2リットルの水を豪快に飲む

美咲　・・・そっか、うん・・・わかった
泰介　わかったって
里美　思い出したんですか？
美咲　思い、出さないけど、けど、それがホントなのは、わかる。なんでかわからないけど、知ってる。多分私気付いてた。ずっと・・・
和文　瑤子・・・
美咲　うん。・・・どうも、瑤子です、うーーーん・・・（うずくまる）
里美　無理しなくていいですよ
好江　そうだよ、やっぱりゆっくり時間かけた方がいいんだって
玉子　でも、和文さんいなくなっちゃうし
泰介　お前、バカ！
玉子　あぁ！
美咲　いなくなるって、どっかいくの？
和文　うん、仕事でちょっと
美咲　え、一緒に行っていいんでしょ
和文　出来ないんだ、ごめん
美咲　やだ、一緒がいい。置いてかないでよ
和文　・・・
里美　すぐに戻って来ますよ
亜季　そうですよ。その間、ここで一緒に待ってましょうよ
和文　え？
亜季　始めからそのつもりだったんで
和文　・・・
良平　聞いてないんだけど

亜季　いいよね？私のうちだし
良平　もちろんだよ！
好江　何なら、うちに来てくれてもいいよ
泰介　え！？
好江　住み込みで。その代わりガンガン働いてもらうけど
泰介　玉子は？
好江　玉子には暇を出すから
玉子　聞いてないんですけど
好江　今言ったから。いいよね？私の店だし
玉子　も、もちろんですよ
里美　こき使われて大変だったら私のところに
亜季　先輩のうち狭いでしょ、あと出勤したら一人にしちゃうじゃないですか
里美　でも、インコ飼ってます！
亜季　何言ってんすか？
里美　その子めっちゃ喋るんです。だからさびしくないです。ずーっとうちの上司の悪口言ってます
好江　里美ちゃんが吹き込んだからでしょ
玉子　つらい
亜季　涙出てきましたわ
美咲　なんか、楽しそう
和文　なるべく早く戻ってくるから、みんなと待っててくれないかな
美咲　・・・わかった

壮太朗がサングラスとマスクを着けて、小窓から

壮太朗　それまでは一人にしないんで、安心してください
美咲　・・・誰？
和文　気にしなくていい

小窓、再び閉められる。直明が近づいてきて、ポケットから紙吹雪を瑤子と和文の頭上に散らす

美咲　え、なに？
好江　紙吹雪？
直明　上に大量に置いてあった
里美　あ、もしかしてここでやったお芝居で使ったヤツ？

泰介　あー、そういや降らせたっけな
直明　これ結婚披露パーティでも降らせましたよね
和文　あー、そうだった
好江　そんなのずっと取っといたの？
亜季　うちのお父さん、モノが捨てられない性質で
美咲　結婚披露パーティって？
和文　僕と、瑤子の
美咲　私の？
和文　うん
美咲　（立ち上がる）
好江　大丈夫、まだ気持ち悪い？
美咲　ううん
泰介　気を失った時のこと覚えてるか？
美咲　全然
玉子　水飲む？
美咲　いらない、それよりお腹空いた
好江　いいね。（壮太朗に）ご飯出来た？！
壮太朗　（シルエットのみ）すぐに用意します！
美咲　どっかで聞いたような声
和文　気のせいだよ
亜季　ただの料理人
好江　ちょっと待ってて（家の中へ）
美咲　ねえ、瑤子さんの・・・私の話、もっと聞きたい
和文　無理しなくていいよ
美咲　大丈夫。そうだ、あとお酒も飲みたい！
泰介　それはやめといた方が
美咲　なんで？苦手だった？
和文　好きだったけど、酒癖が悪くて
美咲　知らないよ！飲まなきゃやってられないんだよ！
良平　よーーし、一番高いワイン開けちゃおう！（家の中へ）
亜季　せこ！隠し持ってたんだ
良平　（小窓から）ホントに高いんだよ、やっぱりどうしようかな
直明　持ってこーい！
良平　はい！（去る）
美咲　この雪で何のお芝居したの？
泰介　フランダースの犬だよ

玉子　あー、めっちゃ好き、泣けるよね
和文　僕が台本に直して
美咲　私何の役？
里美　もちろん主役ですよ
美咲　じゃあネロだ
泰介　違う
美咲　え、じゃあヒロイン？
泰介　パトラッシュだよ
玉子　パトラッシュって、犬？
美咲　え、犬役？ひどくない？
泰介　お前がやりたいって言ったんだよ！
和文　大変だったよ。入り込むから
亜季　しばらく四つ足で生活したり
玉子　こわッ！
里美　ドッグフード食べたりとか、すごく嫌でした
美咲　私、ちょっと変わってた？
直明　ちょっとじゃありません
亜季　でもうちのお父さんは感動して泣いてましたよ
泰介　あー、雪の中をネロがいる教会に向かうシーンな
和文　あれはいいシーンだったね
亜季　だからお父さん、その時の雪を取っておいて、結婚披露宴でも
直明　新郎新婦の二人がそこに立って、二階から雪を撒いて
美咲　へえー・・・
里美　コレまだあるんでしょ？降らせちゃう？
玉子　じゃあ私が上から撒いてあげる

玉子、二階に上がっていく

美咲　それから？私、どんな感じだった？
泰介　その時はもうお腹が少し大きくて
美咲　それは、美咲？
和文　うん
里美　ここにバージンロード敷いたんですよね
亜季　で、お父さんが神父役やって
泰介　そうそう
美咲　それ再現してみていい？

和文　ええ？！
美咲　だって、なんか思い出すかもしれない
里美　じゃあ二人ここに並んでください
亜季　で、神父が「愛を誓いますか」って
直明　誓いますか？
和文　え？なにが？
直明　なにが？じゃないよ。発砲するぞ
和文　誰だよ、直明に酒飲ませたの？
里美　和さん誓って
和文　いいよ、もう。恥ずかしいから
美咲　なんか思い出せそうな気がする
和文　お前それホントか？
里美　和さん！
和文　誓う誓う。誓います
美咲　私も誓いまーす
亜季　で、泰ちゃんがそれを暗ーい目で見てて
泰介　それはいいんだよ
美咲　なんで？
泰介　知らない！
里美　で、指輪の交換をした後
美咲　え、誓いのキス？
和文　それはしてない
美咲　なんで？
里美　泰介さんが哀しむから
美咲　どういうこと？
泰介　知らん！で、みんなでこうやってトンネル作って、ほら、早くくぐれこのバカ
和文　バカって何だよ
泰介　なんか色々蘇ってきた
直明　男の嫉妬は醜いですよ

好江と良平が来る

好江　食事の用意出来たよ。って、何やってんの？
里美　披露宴の再現です。混ざってください

みんなが作るトンネルの中を、和文と美咲が通る。みんな口々に「おめでとう」

とか「お幸せにー」とか、二人に言葉を贈る

里美　で、二人が外に出たところで雪、玉ちゃん！

上から雪が降ってくる。二人、それを浴びる。

美咲　すごーい！

美咲、雪を浴びながら一人くるくると回る。それを眺める一同と和文。と、美咲がふいに体の動きを止める

美咲　・・・！！

和文　・・・瑤子？

瑤子　（お腹を触りながら）美咲・・・美咲だ・・・あの時・・・私のお腹の中にいる美咲が・・・初めて私のお腹を蹴って・・・私の嬉しい気持ちが伝わったみたいに、何度も何度も、力いっぱい

和文　瑤子

瑤子　・・・和さん、私、もう美咲に会えないのかな。美咲に会って、謝ることって出来ないのかな。私・・・美咲を

和文　（瑤子を抱き）謝ることなんか何もない。瑤子は何にも悪くない

瑤子　会いたい。あの子に会いたい

和文　会える。今も会ってる。美咲はいなくなったわけじゃない

抱擁する二人を遠巻きに眺める一同。と、直明のスマホが震える。電話に出る直明

直明　・・・はい。・・・うん・・・え？！

泰介　どうした？

直明　・・・金田の事件。犯人が捕まったって

泰介　・・・！

暗転

明けると、早朝。外はまだ暗い。泰介が一人、椅子に腰かけている。と、ドアが開いて好江が出て来る

好江　・・・おはよ

泰介　おう

好江　もしかして寝てないの？
泰介　まあ
好江　そりゃ寝れないか
泰介　もう帰んのか？
好江　うん
泰介　随分早いな。まだ五時だぞ
好江　瑤子さん、魚好きみたいだから、土浦まで行って仕入れてこようと思って
泰介　そっか。大丈夫か運転
好江　お酒はとっくに抜けてるから・・・連絡あった？須藤さんから
泰介　うん、さっき
好江　結局和文さんが原因じゃなかったってことなんでしょ？
泰介　和ともめて階段から落ちた後、倒れてる金田から財布を取ろうとした奴がいて
好江　介抱ドロってやつ？
泰介　すぐ金田は意識を取り戻して、そいつともみ合いになって、突き飛ばされたはずみで頭を打った。重体に陥ったのはその時の打撲が原因らしいから
好江　なんだかなあ
泰介　あと、目撃者の話だと
好江　いたんだ？目撃者
泰介　和は殴りかかって来た金田をよけただけで、突き飛ばした訳でも何でもないらしい
好江　なんか、あの人らしいね
泰介　人騒がせだよ。あ、それと
好江　ん？
泰介　金田が意識を取り戻したって
好江　あ、そ。・・・それはどうでもいいけど
泰介　おい
好江　・・・いい夫婦だね
泰介　うん・・・悪かったな色々
好江　何が？
泰介　巻き込んで
好江　（ため息）あのさ・・・
泰介　うん？
好江　あんたってホントに何にも話さないんだね。昔はそんなことなかったのに
泰介　・・・
好江　売り上げとか、仕入れのこととか、店のことばっかり。あとは喧嘩。いいんだけどね・・・なんかないの、他に？
泰介　何が？

好江　私と話したいこと
泰介　・・・
好江　・・・ないか（帰ろうと）
泰介　じゃあ
好江　お！なになに？
泰介　・・・いや
好江　何だよ！
泰介　・・・ピアノ、もう弾かねーのか
好江　・・・へ？あー・・・別に。え、聴きたいの？
泰介　そうじゃなくて、それ（火傷）のせいかなって
好江　あー、そりゃ多少は突っ張るけど。弾こうと思えば別に・・・へー
泰介　何だよ
好江　そういや、これこさえた時も随分落ち込んでたっけ。もしかしてこれを気にして一緒になったとか？責任を取るみたいな
泰介　そんなことはねーよ
好江　だよね。私が自分でドジっただけだもん
泰介　でも、店手伝ってなけりゃ
好江　それこそ、たられば じゃない。それに、店ってもう私らの子どもみたいなもんでしょ。だから、この火傷だって私の勲章・・・それはちょっと言い過ぎだけど。なんてことないよ
泰介　そうか
好江　・・・よかったね
泰介　ん？
好江　もともとは、昔の仲間が集まれるような場所を作りたくて、店を始めたんでしょ
泰介　・・・
好江　願いが叶うね

好江、庭から外に出ていく。泰介、立ち上がって、朝日が差し始めた空を見る
暗転
明けると、翌日のお昼。良平がパソコンを開いて、考え事をしている。何かを書き始めようとしたところで、ドアが開いて、瑤子が帰る準備を整えて出て来る

良平　あ、忘れ物ないように・・・て僕もしょっちゅうやっちゃうんですけど
瑤子　そうなんですよねー。・・・お仕事ですか？
良平　あぁ、（パソコンを閉じて）今日ちょっと打ち合わせがあって
瑤子　かっこいいですね

良平　全然。あ、お酒好きなんですよね？
瑤子　はい。すごく
良平　良かったら、いぶりがっこ持って行ってください。ちょっと待ってて（家の中へ）
瑤子　すみません

瑤子、一人車庫の中に佇む

和文　大丈夫？もう出られる？
瑤子　・・・さびしい
和文　え？
瑤子　だって起きたらみんないなくなってるんだもん
和文　しょうがないでしょ、仕事あるんだから。昼過ぎまで爆睡するから、心配したよ
瑤子　うん、よく寝た。スッキリ
和文　それにどうせ夜会えるでしょ
瑤子　うん、楽しみ。泰介と好江さんのお店・・・その前に警察に寄っていくんでしょ？
和文　うん、今日はそんなに時間はかからないみたいだけど
瑤子　そっか
和文　美咲だった時のこと、って言ったら変な言い方だけど
瑤子　うん
和文　全部覚えてるんでしょ？
瑤子　あー、うん・・・湖の底の方からね、じーっと上の様子を眺めてたみたいな、そんな感じ？
和文　へぇ
瑤子　その時も、美咲がずっとそばにいてくれたような気がする。今も
和文　うん。俺も
瑤子　・・・
和文　瑤子の体を借りて、ホントに美咲がそこにいるんじゃないかって感じたことが何度もあった
瑤子　うん。そうかもしれない

亜季、家の中から出て来る。ワインを手にしている

亜季　あ、これ、まだ隠し持ってたワインあったんで、持って帰ってください
和文　いい、いい、申し訳ないよ
亜季　全然。どうせ良平君、味なんか分かんないんだから
瑤子　じゃ、遠慮なく

和文　おい！

インターホンが鳴る。

亜季　（奥に向かって）良平くーん、出てーー！
良平　（奥から声のみ）はーい
亜季　あと、昨日壮太朗が作った料理の残りも入ってます
和文　結構おいしかったね。意外だった
瑤子　彼、割と器用なんだよね
和文　美咲は、ホントに・・・
瑤子　ん？
和文　彼のことが、気になってたのかな
瑤子　うん、そうだね
和文　あ、そう
亜季　恋愛の対象としてですか？
瑤子　え、それはないよ
和文　でも、壮太朗くんはそう言ってたから
瑤子　彼、変わってるの。美咲、希少動物を見つけたって喜んでたから。あの子昔から珍しい生態の生き物とか好きだったでしょ
和文　確かに
瑤子　彼、面白いもの
亜季　ですよね、私も大好物です

中から良平がアマゾンの箱を持って出て来る

良平　よかった、間に合ったよ
瑤子　なんですか？
良平　昨日、注文したでしょ、アマゾン。僕が送ったギフトカード使って
瑤子　え、全然分かんないんだけど
良平　あれ？全部覚えてるんじゃ・・・
亜季　そのはずだけどね
良平　ほら、ゲームで勝負して、僕に勝って、欲しい物があるって言ってたでしょ
瑤子　ゲームしたのは覚えてるけど、私そんなこと言った？
亜季　言ってましたね
良平　プレゼントだって言ってたから、和文さん宛てだと思うんだけど

中を開けてみる。中からフェイスマッサージ器が出て来る

瑤子　これって・・・フェイスマッサージ器・・・（和文に）はい
和文　いや、いらないね。・・・あ！
瑤子　なに？
和文　美咲と、瑤子の誕生日に何をプレゼントするか相談してて、確か・・・これ、そうだ。これに決めたんだった
瑤子　・・・美咲
良平　え、どういうこと？これって・・・
亜季　信じるか信じないかは、あなた次第

瑤子、プレゼントを抱く。しばしの間

瑤子　・・・そっか・・・うん。これって、綺麗なお母さんでいてくれってことかな
和文　え、ああ。そうかな
瑤子　・・・行こうか
和文　うん
瑤子　お世話になりました
亜季　どうせ今夜すぐ会いますけどね
良平　すいません、僕は仕事があって行けなくて、あ、これ、いぶりがっこ
瑤子　また遊びに来ます
良平　はい、いつでも
和文　じゃあ（会釈）

二人、去る。亜季、塵取りを取り出して、紙吹雪の掃除を始める

良平　あ、いいよ。やるから
亜季　あ、そう？じゃあお願い。ご飯昨日の残りものでいいよね？
良平　うん
亜季　今日って編集の人と新作の打ち合わせだっけ？
良平　うん
亜季　構想とかもうあるの？
良平　まあ・・・うん、ずっと前からあたためてるヤツがね
亜季　へー、そうなんだ
良平　・・・うん
亜季　・・・

良平　・・・え、なに？

亜季　ううん。ま・・・別にいいんだけどね

亜季、家の中へ。良平、紙吹雪のひとひらを手に取り、また机に向かう。パソコンを開いて、しばらく迷っているが、我慢出来なくなったように勢いよく書き始める。しばらくキーボードを叩いたあと、脇に置いた雪のひとひらを見て、作業を止める

良平　・・・

再び書き始めるが、徐々に途切れていく。ついには手を止めて、また雪のひとひらを手に取って、頭上に投げる。ひらひらと落ちる雪のひとひら

良平　・・・

良平、しばらく画面の文面を見た後、全部デリートで消す。ため息をつくように笑った後、パソコンを勢いよく閉める。同時に暗転

暗い中、タイトルが壁に映し出される。その脇では紙吹雪がちらつくように降り続けている

おわり